

長崎原爆資料館展示更新実施設計 (最終案)

令和8年2月17日

長崎市

■ 目次

基本的な考え方	01
展示シナリオ	02~07
展示ゾーニング図	08~09
コーナー概要	
A. 1945年8月9日	10
1. 1945年8月9日	11
B. 原爆による被害の実相	12
2. 原爆による被害の実相	13~15
休憩スペース	16
C. 核兵器のない世界を目指して	17
3. 二つの世界大戦	18~24
4. 核兵器の脅威	25~29
5. 長崎のあゆみ	30~35
世界のヒバクシャなどに関する展示	36
長崎の被爆者などに関する展示	36
平和は長崎から	37
D. ビデオルーム	38
情報メディアコーナー	39
ユニバーサルデザインの推進	40
開館しながらの工事への対応	41

展示更新にかかる基本方針

1 長崎原爆資料館の基本理念・設置目的（再掲）

(1) 基本理念

長崎国際文化会館の建て替えにあたり作成した基本構想及び基本計画において、原爆資料館の基本理念を次のように定めている。（平成4年（1992年）2月）

長崎市は、原爆被爆都市の使命として核兵器の脅威と非人道性、戦争の悲惨さ、平和の大切さを世界に訴える責務がある。
したがって、原爆被爆に関する資料の体系的な整備、展示、保存を図るとともに戦争の恐ろしさや原爆被爆の体験を次代を担う子供たちに語り伝え、世界恒久平和実現に努力する国際平和都市長崎のシンボリックな施設とする。

(2) 設置目的

長崎原爆資料館の開館に向け、長崎原爆資料館条例を制定し、資料館の設置目的を次のように定めている。（平成7年（1995年）12月）

（設置）

第1条 本市は、原子爆弾により被爆した都市の使命として、被爆の実相と長崎市民の平和への願いを広く国の内外に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため、原爆資料館を設ける。

（事業）

第3条 長崎原爆資料館は、次に掲げる事業を行う。
 (1) 被爆及び平和に関する資料の調査、収集、保存及び展示に関すること。
 (2) 平和学習、被爆体験の継承その他平和を考える場の提供に関すること。
 (3) 平和を推進するための調査及び研究に関すること。
 (4) その他市長が必要と認める事業

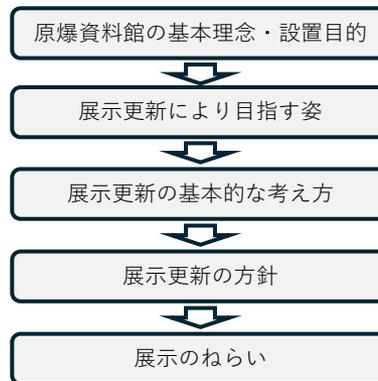
2 展示更新により目指す姿

原爆の被害を遠い昔の出来事ではなく、今の自分にも起こりうることとして受け止め、自ら平和を考え、行動することにつながる資料館になっている。

3 展示更新の基本的な考え方

館の基本理念や目的は変えず、時代の変化に応じて展示内容を更新する。

- (1) 戦争から遠くなった世代に、戦争（核兵器）によって日常が壊されることを自分事として捉えてもらうことで、原爆の被害の実相や被爆者の苦しみと願いをわかりやすく伝える。
- (2) 誰もが今も核兵器のある世界に生きる当事者であると同時に、平和な未来をつくる当事者であることへの気づきにつなげる。
- (3) 一人ひとりが身近なところから平和について考え、行動するきっかけをつくる。



■長崎原爆資料館 展示構成 (1)

ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
円形スロープ 円形パビリオン	戦争を知らない世代でも、戦争を他人事ではなく、自分の身にも起こりうることで捉えられるようにする。	円形スロープ 円形パビリオン	時をさかのぼる回廊	現在から1945年8月9日11時2分に向けて、時を遡るイメージを共有しながらスロープをたどる。そして、戦争中とはいえ、被爆前の長崎にも今の私たちと変わらない人々の暮らしがあり、そうした日常が一発の原子爆弾によって奪われてしまったことを知ってもらおう。	—	グラフィック (既存)	年代表記 (既存)
ロビー		ロビー	—		—	被爆前の暮らし	被爆前の暮らしや街並みに関する写真・映像など
A. 1945年8月9日	導入部。原爆投下により、長崎の街並みや人々の暮らしが一瞬で破壊されたことを伝える。	1. 1945年8月9日	1-1. 永遠の11時2分	決して忘れてはならない1945年8月9日11時2分を象徴する資料の展示や、被爆前後の様子が比較できる長崎の街並みの写真などを紹介し、長崎に投下された原爆の威力や被害の惨状などを視覚的に理解したうえで、資料館の見学を始められるようにする。	メッセージサイン	アクリル切文字 (既存)	「長崎を最後の被爆地に」多言語テキスト
			1-2. 被爆前後の長崎		—	展示ケース	破壊され停止した柱時計
			1-3. 原爆投下		被爆前後の長崎	グラフィック・写真	被爆前後の様子が比較できる写真など
B. 原爆による被害の実相	被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということ伝える。	2. 原爆による被害の実相	2-1. 原子野と化した長崎の街	—現状展示を継承—	原爆投下	グラフィック 米軍の原爆投下映像をループ上映	原爆投下の映像
			2-2. 浦上天堂の惨状				
			2-3. 長崎原爆投下までの経過				
			2-4. 被爆した長崎の街				
			2-5. 長崎型原爆 (ファットマン)				
			2-6. 熱線による被害				
			2-7. 爆風による被害				

■長崎原爆資料館 展示構成 (2)

ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
B. 原爆による被害の実相	被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということを伝える。	2. 原爆による被害の実相	2-8. 放射線による被害	被爆者がいかに長く放射線に苦しめられ、またどのように向き合ってきたのか、医学の進歩による新しい知見も含め、わかりやすく伝えることで、原爆が単なる大きな爆弾ではなく、長期的な健康被害をもたらす特殊な爆弾であることを理解してもらう。	2-8-1. 原子爆弾と放射線	グラフィック	—
					2-8-2. 初期放射線と残留放射線	グラフィック	放射線の種類と性質、初期放射線と残留放射線の模式図など
					2-8-3. 被ばく線量と人体への影響	グラフィック・写真	放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図など
					2-8-4. 急性障害と後障害	グラフィック・写真・資料・絵画	脱毛や皮下出血などの写真 急性障害で亡くなった被爆者に関する資料など
					2-8-5. 胎内被爆	グラフィック・写真・資料・絵画	被爆した妊婦が描いた絵画 小頭症患者の写真など
					2-8-6. 遺伝的影響	グラフィック	—
					2-8-7. 被爆医療の取り組み	グラフィック	—
					2-8-8. 医学的調査の始まり	グラフィック・写真	調教授の手記 放射線による障害の図表など
					2-8-9. 被爆医師の証言	グラフィック・写真・資料・映像	朝長先生の証言映像など
					2-8-10. 人体影響の生涯持続性	グラフィック・写真	MDSの増加を示す図表など
			2-9. 救援・救護活動	被爆直後の困難を極めた救援・救護と、その活動に従事した人々について知ってもらう。	2-9-1. 混乱と慟哭の中で	グラフィック・写真・資料	救護所で使用された医療器具など
					2-9-2. 永井隆博士	グラフィック・写真・資料	永井隆博士の写真や遺品など
			2-10. 被爆者と遺族の戦後	被爆者や遺族のエピソードを通して、原爆が長期にわたって人々を苦しめ続けた事実を認識してもらう。	2-10-1. 身体的・精神的な苦しみ	グラフィック・写真・資料	後遺症やトラウマを抱えた人々に関する資料など
					2-10-2. 大切な人を失った悲しみ	グラフィック・写真・資料	家族や友人を亡くした人々に関する資料など
2-10-3. 生活における困難	グラフィック・写真・資料	原爆孤児や孤老、貧困にあえぐ人々に関する資料など					
2-10-4. 社会的な差別と偏見	グラフィック・写真・資料	就職や結婚の際に不当な扱いを受けた人々に関する資料など					
2-11. 被爆者の訴え	—現状展示を継承—	—	—	—			

■長崎原爆資料館 展示構成 (3)

ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料		
C. 核兵器のない世界を目指して	原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。	休憩スペース	—	—	—	—	—		
		3. 二つの世界大戦	象徴展示：核兵器の誕生	—	—	原子爆弾 (模型)	原寸模型	ガジェットの原寸模型 AR：原子爆弾さく裂の仕組み	
						兵器の開発と戦い方の変容	グラフィック・写真	毒ガスや戦車、飛行機の写真など	
			3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた 国際秩序の形成	—	—	—	3-1-1. 世界戦争への道	グラフィック・写真・資料	帝国主義に関する写真や絵画、サラエゴを訪れたオーストリア皇位継承者夫妻の写真など
							3-1-2. 総力戦と新兵器の出現	グラフィック・写真・映像	塹壕でガスマスクを着用した兵士の写真、第一次世界大戦の映像など
							3-1-3. 平和主義と国際協定制の確立	グラフィック・写真	国際連盟第一回総会の写真、ワシントン会議の写真など
							3-1-4. 戦闘行為の規制と戦争の違法化	グラフィック・写真	パリ不戦条約に署名・調印する各国全権の写真、戦闘行為や戦争を規制する国際法の表など
			3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と 国際社会	—	—	—	3-2-1. 満洲事変と国際連盟からの脱退	グラフィック・写真	満洲事変と満洲国建国に関する写真、「大満洲国」のチラシなど
							3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化	グラフィック・写真・資料	日中戦争における日本軍の写真、国内の戦時体制に関する写真やポスターなど
							3-2-3. 第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発	グラフィック・写真・映像	ポーランドを侵攻するドイツ軍の写真、真珠湾攻撃で炎上する戦艦アリゾナの写真など
			3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下	—	—	—	3-2-4. 世界戦争の実相と展開	グラフィック・写真・資料	連合国による空襲と破壊された街の写真、沖縄戦の写真など
							3-3-1. 原爆の開発と実用化	グラフィック・写真・資料・映像	モード委員会報告書の写真、トリニティ実験の映像、トリニタイトなど
							3-3-2. 原爆の使用決定	グラフィック・写真	ルーズベルト大統領とチャーチル首相の写真、原爆投下命令書の写真など
							3-3-3. 原爆投下に反対する人々	グラフィック・写真	ジョージ・マーシャルの写真、ジェームズ・フランクとフランクレポートの写真など
			戦時下の長崎	—	—	—	3-3-4. 広島・長崎への原爆投下	グラフィック・写真	原爆投下の目標とされた都市の図、原爆で壊滅した広島と長崎の写真など
							1. 軍需産業都市・長崎	グラフィック・写真・映像	戦艦武蔵や九一式魚雷の写真、被爆前の長崎の街並みを写した映像など
							2. 長崎から戦場へ	グラフィック・写真・資料	長崎市内における出征風景の写真、千人針や慰賜の煙草など
3. 銃後のくらし	グラフィック・写真・資料	大日本国防婦人会の写真、戦地に発送する慰問袋の写真など							
4. 勤労動員の日々	グラフィック・写真・資料	軍需工場に動員される学生の写真、学徒報国隊の腕章など							
5. 警報下の長崎と空襲	グラフィック・写真・資料	防空演習の写真、防空頭巾とモンペなど							

■長崎原爆資料館 展示構成 (4)

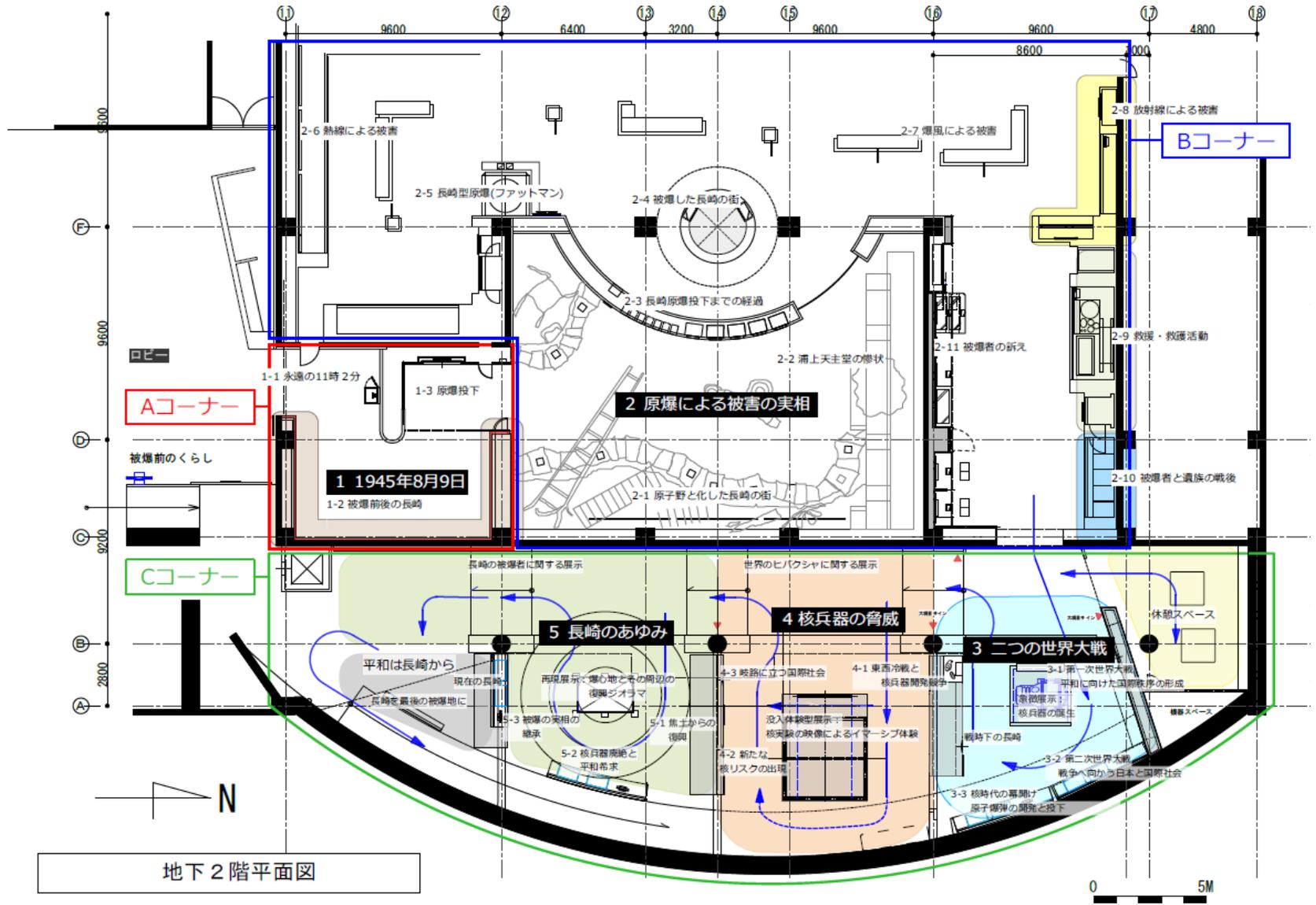
ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
C. 核兵器のない世界を目指して	原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。	4. 核兵器の脅威	没入体験型展示： 核実験映像による イメージ体験	核兵器の開発をめぐる複雑な歴史や国際情勢、そして近年、核兵器使用の危険性が高まっていることを伝えることで、誰もが核兵器が存在する世界に生きる当事者であると自覚してもらうとともに、被爆地をはじめ、世界の多くの人々が核兵器廃絶のための活動に取り組んでいることを知ってもらう。	原水爆実験映像	体験型映像	水爆実験の映像（3面映像）など
			4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争		4-1-1. 原子力の国際管理の失敗	グラフィック・写真・資料	冷戦の構造を示す地図など
					4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ	グラフィック・写真・資料	水爆実験の写真 世界終末時計に関する資料など
					4-1-3. 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動	グラフィック・写真・資料・模型	第五福竜丸事件に関する資料 原水爆禁止世界大会の写真など
			4-2. 新たな核リスクの出現		4-1-4. 世界が最も核戦争に近づいた日	グラフィック・写真	キューバ危機の写真 米ソによる核戦争の危機を風刺した作品など
					4-1-5. 核拡散防止への取り組み	グラフィック・写真・資料	核兵器廃絶への取り組みに関する写真や資料など
					4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散	グラフィック・写真・資料	新興核保有国の核開発に関する資料など
			4-3. 岐路に立つ国際社会		4-2-2. 核兵器関連物質と開発技術の流出	グラフィック	核の闇市場に関する図など
					4-2-3. 核テロの危険性	グラフィック・写真	想定される核テロリズムの図など
					4-3-1. 核使用リスクの高まり	グラフィック・映像・資料	核兵器使用のシミュレーション「核の脅し」を報じる新聞記事など
4-3-2. 核兵器禁止条約の発効	グラフィック・写真・資料	核兵器禁止条約の採択時の写真など					
世界のヒバクシャなどに関する展示	4-3-3. 日本被団協のノーベル平和賞受賞	グラフィック・写真・資料	ノーベル平和賞の授賞式の写真など				
	—	グラフィック・写真・映像	核実験の被害者に関する写真など				

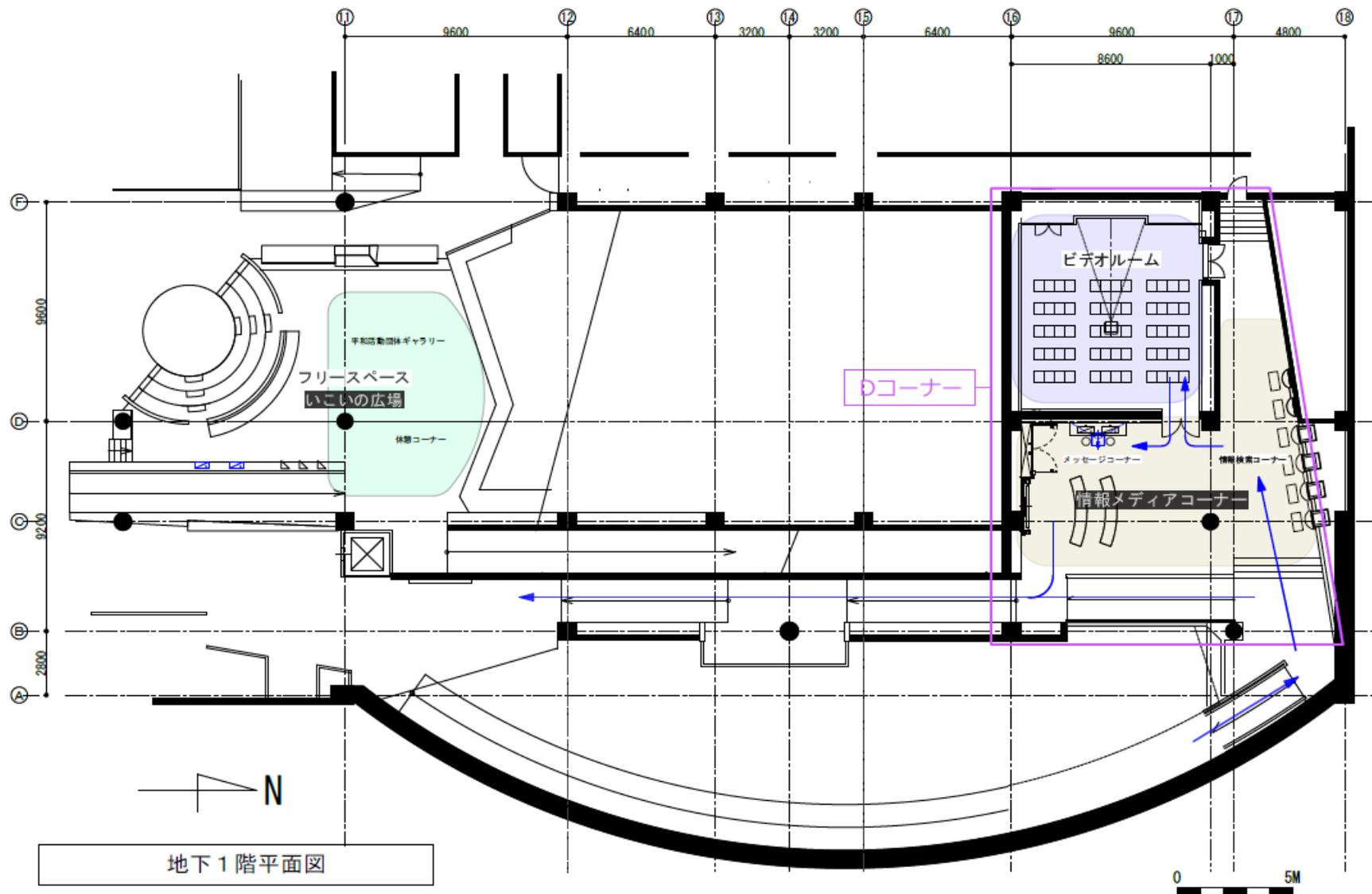
■長崎原爆資料館 展示構成 (5)

ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
C. 核兵器のない世界を目指して	原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。	5. 長崎のあゆみ	再現展示： 爆心地とその周辺の復興ジオラマ	長崎の平和と核兵器廃絶に向けた取り組みが過去から現在に至るまで絶え間なく続いていることを示すことで、長崎市民の平和と核兵器廃絶に対する願いに共感してもらい、未来へ受け継いでらう。	原爆投下から10年が経過した爆心地付近	原爆投下から10年が経過した爆心地付近の様子： 縮小ジオラマ AR：被爆直後、1955年、現在の写真・映像	原爆投下から10年後の爆心地付近のジオラマ
			5-1. 焦土からの復興		5-1-1. 被爆後のくらし	グラフィック・写真・資料・映像	焼け跡に建てられたバラックの写真、被爆後の街の様子を写した映像など
					5-1-2. 占領軍の駐屯と都市機能の復旧	グラフィック・写真	デルノア通りの看板を見るデルノア氏とキャサリンの写真、岩川町の戦災復興住宅の写真など
					5-1-3. 長崎国際文化都市建設法	グラフィック・写真・資料	長崎国際文化都市建設の平和宣言を行う長崎市長の写真、平和祈念像や長崎国際文化会館の写真など
					5-1-4. 原爆犠牲者の慰霊と平和祈念	グラフィック・写真・資料	原爆犠牲者慰霊並びに平和祈念式典の写真、平和宣言文など
			5-2. 核兵器廃絶と平和希求		5-2-1. 原水爆禁止運動の始まり	グラフィック・写真・資料	第2回原水爆禁止世界大会の写真、被爆体験を証言する被爆者の写真など
					5-2-2. 広がる反核・平和運動	グラフィック・写真	平和首長会議や非核宣言自治体協議会の写真、長崎平和推進協会やながさき平和大会の写真など
					5-2-3. ナガサキから世界へ	グラフィック・写真・映像	国連で演説する山口仙二さんの映像、海外原爆展の写真など
			5-3. 被爆の実相の継承		5-2-4. 次世代がつむぐ平和	グラフィック・写真	高校生平和大使の写真、高校生1万人署名活動の写真、ナガサキ・ユース代表団の写真など
					5-3-1. ナガサキを残し、伝える	グラフィック・写真・資料	長崎市原爆資料館（通称：六角堂）の写真、長崎の証言の会『長崎の証言』など
		5-3-2. 被爆遺構の保存と活用		グラフィック・写真・映像	被爆遺構や被爆樹木の写真など		
		平和は長崎から	5-3-3. 未来につなぐ被爆の記憶	グラフィック・写真	家族・交流証言者や青少年ピースボランティアの写真など		
			長崎の被爆者などに関する展示	—	グラフィック・写真	原爆の被害に遭った人々の戦後のライフストーリーを表す写真や言葉、被爆者と若い世代が協同している写真など	
現在の長崎	最後にあらためて「長崎を最後の被爆地に」のメッセージを共有してもらう。	—	グラフィック	現在の稲佐山からの風景写真			
長崎を最後の被爆地に	—	—	グラフィック	「長崎を最後の被爆地に」多言語テキスト			

■長崎原爆資料館 展示構成 (6)

ゾーン	目的	展示大項目	展示中項目	ねらい (展示大項目)	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
D.ビデオルーム	来館者が自ら平和のためにできることを考え、行動するきっかけを提供する。	情報メディアコーナー	ビデオルーム	様々なメッセージ、被爆者の証言、平和団体の活動に触れることで、平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動したり発信したりするきっかけをつかむ。		大型映像	既存映像、新規映像
					メッセージコーナー	PC+タッチペン、映像演出	来館者のメッセージを残す 来館者メッセージ表示
					大型映像	タッチパネル	被爆遺構検索 被爆樹木検索
					情報検索コーナー	PC検索	Q&A (更新型)
					PC検索	平和宣言アーカイブ 被爆証言アーカイブ 他	
いこいの広場	—	フリースペース	平和活動団体ギャラリー	平和や核兵器廃絶に向けて発表の場			
			休憩コーナー	—	近隣誘導サイン ※既存PC撤去部に設置	—	—
全館	—	多言語解説	—	タブレット端末を導入予定	展示解説	—	既存：11カ国語対応
		音声解説	—		多言語音声ガイド (多言語)	—	既存：12カ国語対応 音声ガイドシステム
		子ども解説	—		展示解説	—	—





地下1階平面図

既存ゾーン名

A. 1945年8月9日

【ゾーンの目的】

導入部。原爆投下により、長崎の街並みや人々の暮らしが一瞬で破壊されたことを伝える。

1. 1945年8月9日

【ねらい】

●1-2. 被爆前後の長崎

長崎に投下された原爆の威力や被害の惨状などを視覚的に理解したうえで、資料館の見学を始められるようにする。



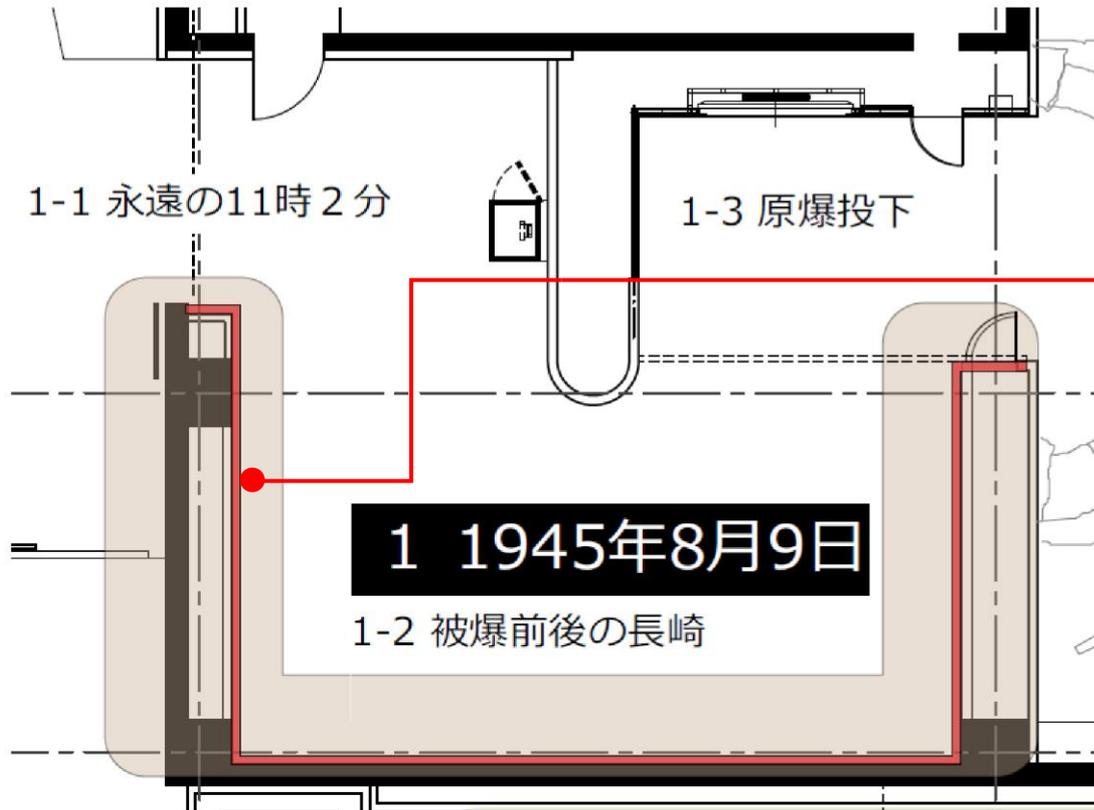
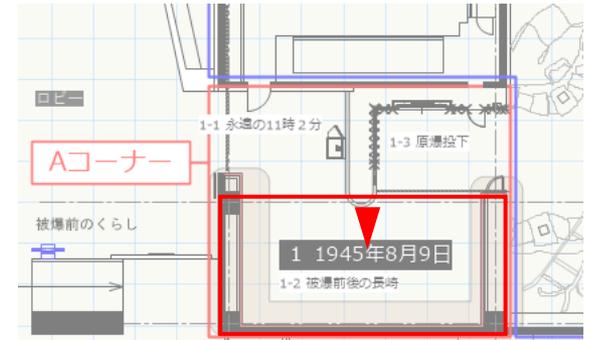
■ 1. 1945年8月9日

1-2. 被爆前後の長崎

【展示概要】

1-2. 被爆前後の長崎

被爆前後の様子が比較できる長崎の街並みの写真などを展示する。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・被爆前後の長崎

展示手法/グラフィック・写真

(被爆前後の様子が比較できる写真など)

既存ゾーン名

B. 原爆による被害の実相

【ゾーンの目的】

被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということを伝える。

2. 原爆による被害の実相

【ねらい】

●2-8. 放射線による被害

被爆者がいかに長く放射線に苦しめられ、またどのように向き合ってきたのか、医学の進歩による新しい知見も含め、わかりやすく伝えることで、原爆が単なる大きな爆弾ではなく、長期的な健康被害をもたらす特殊な爆弾であることを理解してもらう。

●2-9. 救援・救護活動

被爆直後の困難を極めた救援・救護と、その活動に従事した人々について知ってもらう。

●2-10. 被爆者と遺族の戦後

被爆者や遺族のエピソードを通して、原爆が長期にわたって人々を苦しめ続けた事実を認識してもらう。

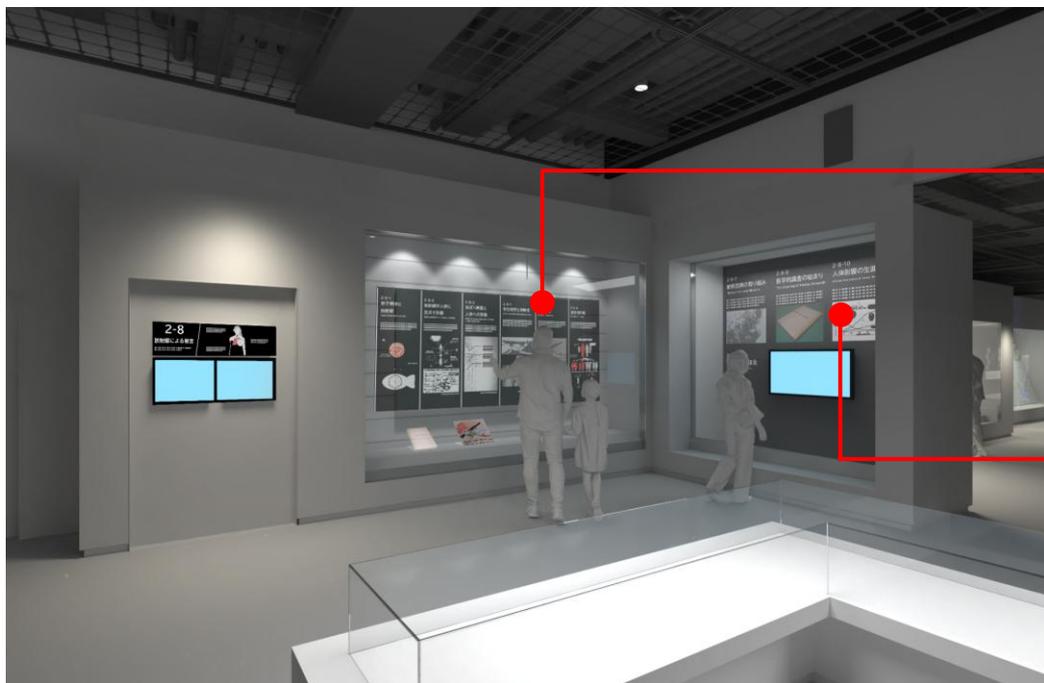


■ 2. 原爆による被害の実相

2-8. 放射線による被害

【展示概要】

原爆が通常の爆弾と異なるのは、放射線を放出することである。放射線は目に見えないが、細胞内部を傷付け、人体に深刻な影響を与える。放射線による影響は、初期のものでは皮下出血や下痢、脱毛などに現れる。そして、被爆から10年が経過すると、がんや白血病、白内障などを引き起こす。放射線による健康被害は生涯にわたって続き、被爆者は自分や子どもが重篤な病気にかかるかもしれないという不安や恐怖に脅かされている。人体への影響も未だ科学的に解明されていない中で、生涯消えることがない被爆者の労苦を紹介する。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- 2-8-1. 原子爆弾と放射線
展示手法/グラフィック
- 2-8-2. 放射線が人体に及ぼす影響
展示手法/グラフィック
(放射線の種類と性質、初期放射線と残留放射線の模式図など)
- 2-8-3. 被ばく線量と人体への影響
展示手法/グラフィック・写真
(放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図)
- 2-8-4. 急性障害と後障害
展示手法/グラフィック・写真・資料・絵画
(脱毛や皮下出血などの写真、急性障害で亡くなった被爆者に関する資料など)
- 2-8-5. 胎内被爆
展示手法/グラフィック・写真・資料・絵画
(被爆した妊婦が後年に描いた絵画、小頭症患者の写真など)
- 2-8-6. 遺伝的影響
展示手法/グラフィック

● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

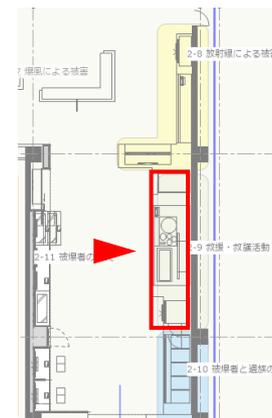
- 2-8-7. 被爆医療の取組み
展示手法/グラフィック
- 2-8-8. 医学的調査の始まり
展示手法/グラフィック・写真
(調教授の手記、放射線による障害の図表など)
- 2-8-9. 被爆医師の証言
展示手法/グラフィック・写真・映像
(朝長先生の証言映像など)
- 2-8-10. 人体影響の生涯持続性
展示手法/グラフィック・写真
(MDSの増加を示す図表など)

■ 2. 原爆による被害の実相

2-9. 救援・救護活動

【展示概要】

原爆投下後、多くの負傷者が救助を待っていたが、治療の拠点となるはずの長崎医科大学は壊滅し、多くの医師や看護師も被爆した。救護活動に従事できる人や治療に必要な薬はあまりにも少なく、街は瓦礫の山で鉄道や道路も寸断されていた。そのような状況の中、必死の救護活動が始まった。夜になると、惨状を伝え聞いた周りの町から救援隊が派遣され、傷ついた人々への治療を行った。しかし、当時は放射線の影響を知る由もなく、救援隊の人々は爆心地付近に残る強い放射線にさらされることになった。過酷な状況の中で行われた救援・救護活動の実態を伝える。永井隆博士は、助教授を務める長崎医科大学付属病院で被爆した。自らも重い傷を負いながらも、負傷者の救護や原爆障害の研究に献身的に取り組んだ姿を紹介する。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・ 2-9-1. 混乱と慟哭の中で

展示手法/グラフィック・写真・資料
(救護所で使用された医療器具など)

● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・ 2-9-2. 永井隆博士

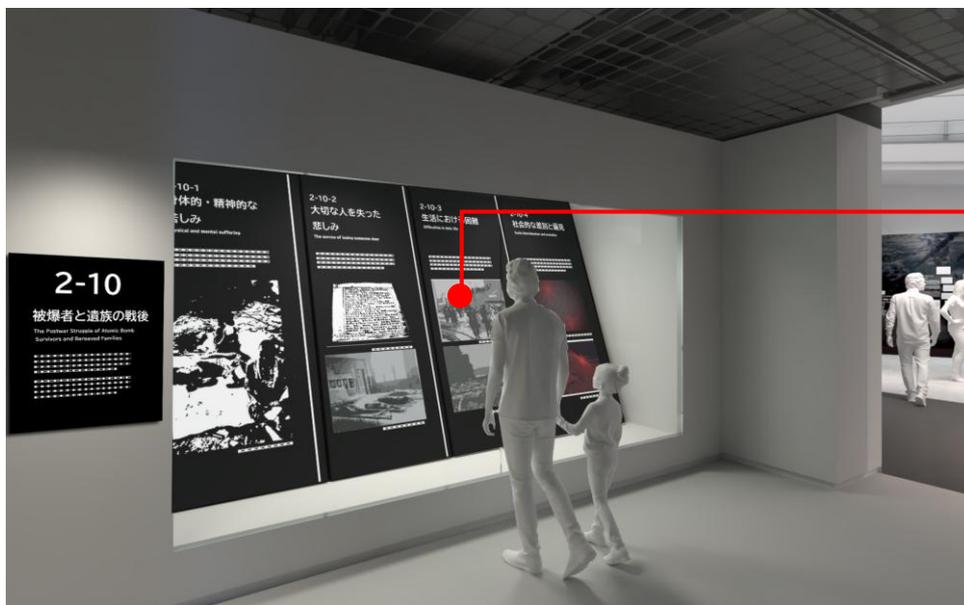
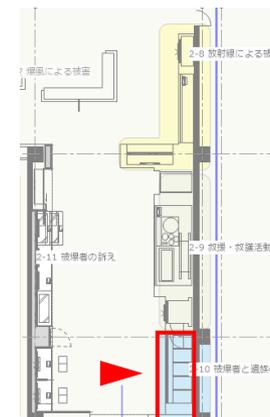
展示手法/グラフィック・写真・資料
(永井隆博士の写真や遺品など)

■ 2. 原爆による被害の実相

2-10. 被爆者と遺族の戦後

【展示概要】

原爆の惨状から辛うじて生き延びた人々も、様々な苦難に直面した。大切な家族や友人を失った悲しみや、体と心に残った傷や病を抱えて生きていかなければならなかった。廃墟となった長崎でいかに生活を立て直し、自分たちの「生きた証」や被爆体験をどのように後世へ残そうとしたのか、資料とともに紹介する。



● 展示小項目グラフィック

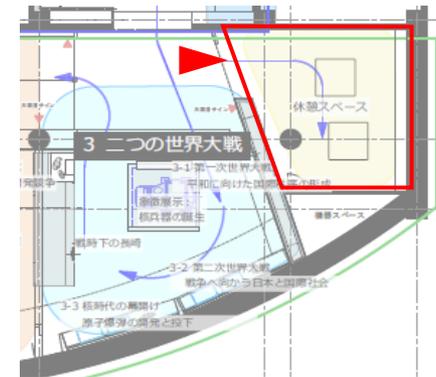
※タイトル日英表記

- ・ 2-10-1. 身体的・精神的な苦しみ
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(後遺症やトラウマを抱えた人々に関する資料など)
- ・ 2-10-2. 大切な人を失った悲しみ
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(家族や友人を亡くした人々に関する資料など)
- ・ 2-10-3. 生活における困難
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(原爆孤児や孤老、貧困にあえぐ人々に関する資料など)
- ・ 2-10-4. 社会的な差別と偏見
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(就職や結婚の際に不当な扱いを受けた人々に関する資料など)

休憩スペース

【概要】

博物館疲労に対処するとともに、次のコーナーに向けて心を整える。
また、壁面スペースを活用し、平和関連施設やイベントなどの情報提供を行う。



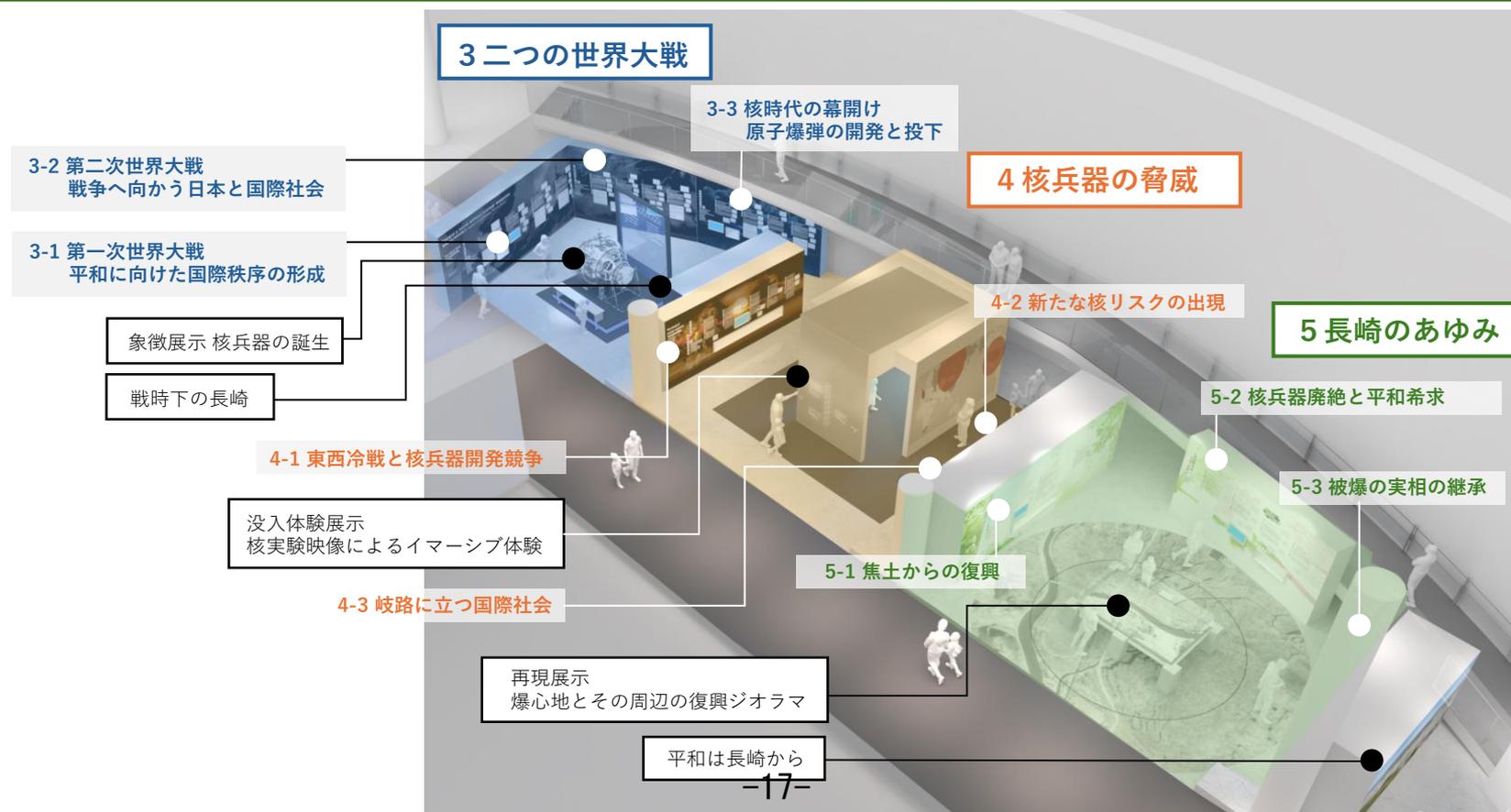
全体俯瞰図（Cコーナー）

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。



既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

3. 二つの世界大戦

【ねらい】

歴史をきちんと見つめることが未来につながるという姿勢のもと原爆投下の背景にあった歴史や原爆の開発から投下に至るまでの道のを客観的かつ多角的な視点からわかりやすく説明することで、戦争から遠くなった世代が戦争の愚かさや核兵器の非人道性について考えられるようにする。

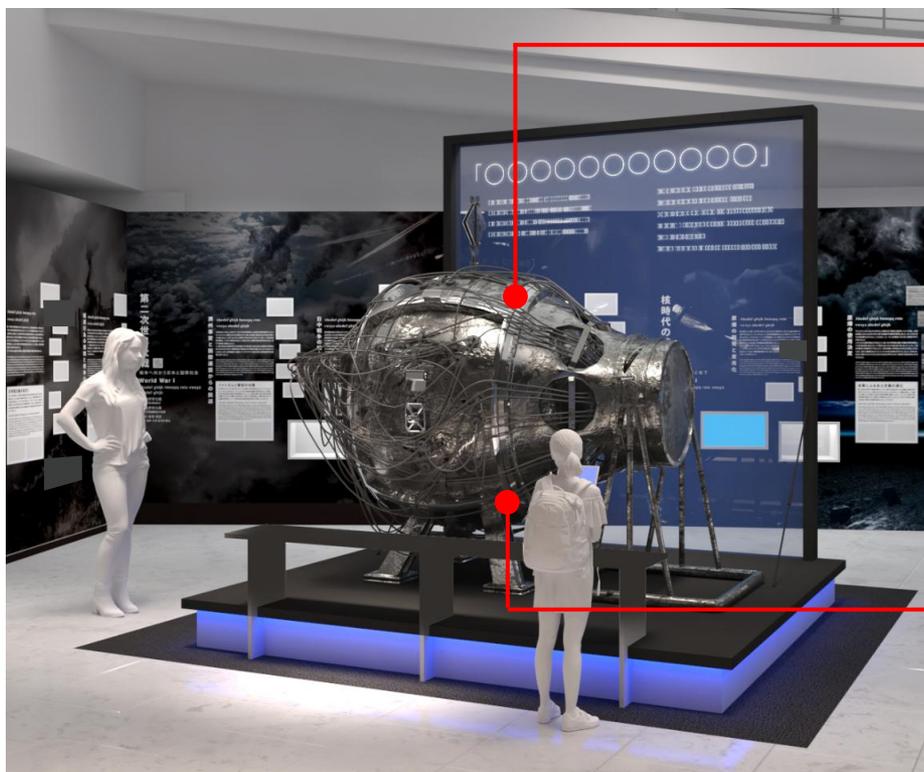
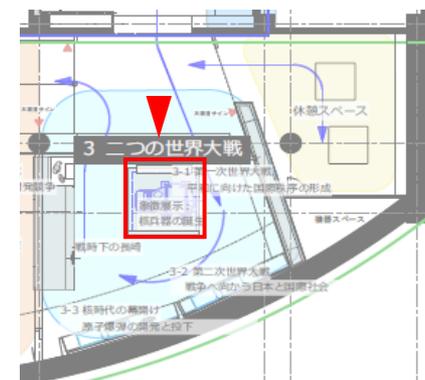


■ 3. 二つの世界大戦

象徴展示：核兵器の誕生

【展示概要】

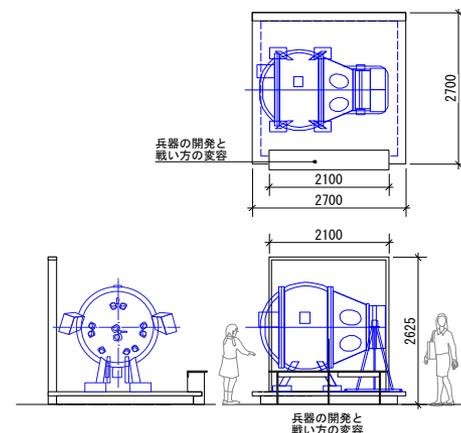
20世紀は科学技術が目覚ましい発展をとげ、人々の生活が豊かになった「科学技術の時代」であったが、二度にわたって世界大戦が起こった「戦争の時代」でもあった。そのため科学技術は兵器の開発にも利用され、最終的には大量破壊や殺戮を瞬時にもたらす大量破壊兵器・核兵器を生み出すことになる。象徴展示では、人類の滅亡をもたらすほどの力を持った核兵器の存在する「核の時代」の幕開けを象徴するものとして、人類初の核実験でさく裂した原子爆弾「ガジェット」の実物大模型を展示。その手前では、科学技術の発展や兵器の開発、戦い方の変化といった観点から核兵器の開発・使用に至った歴史的背景を説明する。



・象徴展示：核兵器の誕生

展示手法/グラフィック・写真

ガジェットの原寸模型・AR：原子爆弾さく裂の仕組み



・展示カウンター

「兵器の開発と戦い方の変容」

展示手法/グラフィック・写真

(毒ガスや戦車、飛行機の写真など)

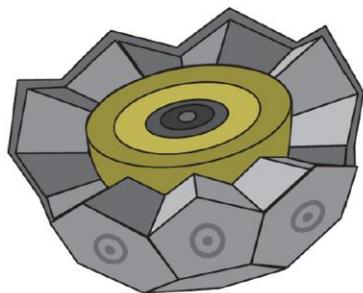
■ 3. 二つの世界大戦

象徴展示：核兵器の誕生

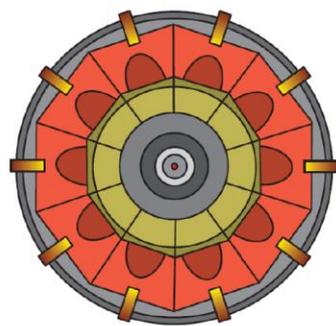
AR:原子爆弾のさく裂のしくみ

<概要>

- ・QRコードを読み込むとARで爆縮レンズのCGが表示され、さく裂に至るアニメーションが再生される。
- ・CGは画面の中央に表示されるため、CGがガジェットの中心に表示されるように、体験者が端末をガジェットに合わせてかざす。
(ポイントを合わせるガイドとしてガジェットの外形が薄いラインで表示される。)



爆縮レンズCG のイメージ爆



爆縮レンズ断面CG のイメージ

<展開>

- ①QRコードを読み込むと言語選択画面が表示される。
- ②11言語のボタンから言語を選択する。
- ③タイトルと、端末をガジェットに向ける旨の案内文が表示される。(5秒)

演出時間約21秒

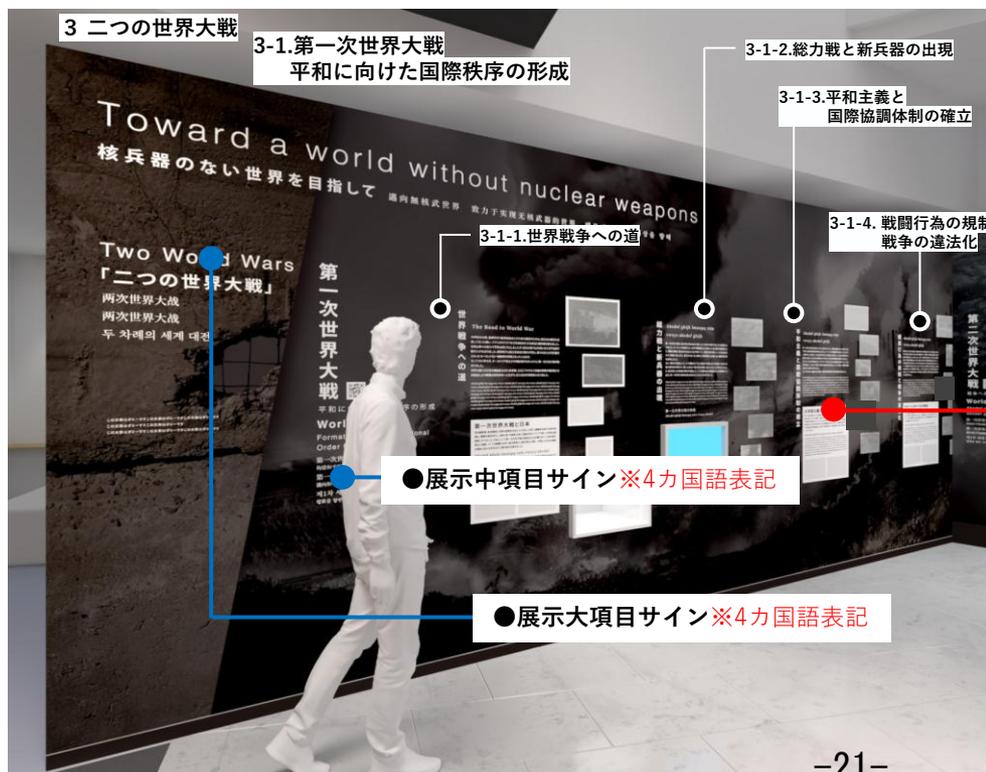
- ④画面の中央に爆縮レンズのCGが表示される。(3秒)
ガジェットの中心に爆縮レンズが表示されるように体験者が端末をガジェットに向けてかざす。
「爆縮レンズ」のキャプション。
- ⑤外殻の一部が外れ火薬が現れる。(3秒)
「火薬」のキャプション。
- ⑥火薬が外れダンパーが現れる。(3秒)
「ダンパー」のキャプション。
- ⑦ダンパーが外れ球体が現れる。(1秒)
- ⑧球体が外れプルトニウムが現れる。(3秒)
「プルトニウム」「直径89mm」「重さ6.2kg」のキャプション。
- ⑨中心の中性子源が現れる。(3秒)
「中性子源」のキャプション。
- ⑩CGが断面図に変わり、爆縮レンズ外殻から中心に向けて赤くなっていく(3秒)
- ⑪中心が黄色くなりさく裂の表現。(2秒)

■ 3. 二つの世界大戦

3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた国際秩序の形成

【展示概要】

19世紀末の世界では、武力で植民地化・権益の奪取を行う帝国主義国家が現れた。そこでは勢力均衡により平和が保たれたが、民衆のナショナリズムや愛国心の高揚などを背景に国際社会はこれまでに経験したことのない世界戦争の道へと突き進んでいく。そして1914年に起こった第一次世界大戦は、軍隊だけでなく人的・物的資源の全てを戦争に動員する大規模な総力戦となり、次々と新兵器が開発・投入され、かつてない規模の犠牲を出した。こうした戦争の惨禍は、強力な平和思想をもたらし、戦後の国際社会では国際連盟や軍縮などによって戦争を防ぎ、平和を目指す国際協調体制が確立。さらに生物化学兵器の使用を禁止し、戦争を違法化する国際条約がつけられた。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

● 3-1-1. 世界戦争への道

展示手法/グラフィック・写真・資料
 (帝国主義に関する写真や絵画、サラエボを訪れたオーストリア皇位継承者夫妻の写真など)

● 3-1-2. 総力戦と新兵器の出現

展示手法/グラフィック・写真・映像
 (塹壕でガスマスクを着用した兵士の写真、第一次世界大戦の映像など)

● 3-1-3. 平和主義と国際協調体制の確立

展示手法/グラフィック・写真
 (国際連盟第一回総会の写真、ワシントン会議の写真など)

● 3-1-4. 戦闘行為の規制と戦争の違法化

展示手法/グラフィック・写真
 (女性による反戦運動の写真、パリ不戦条約に署名・調印する各国全権の写真、戦闘行為や戦争を規制する国際法の表など)

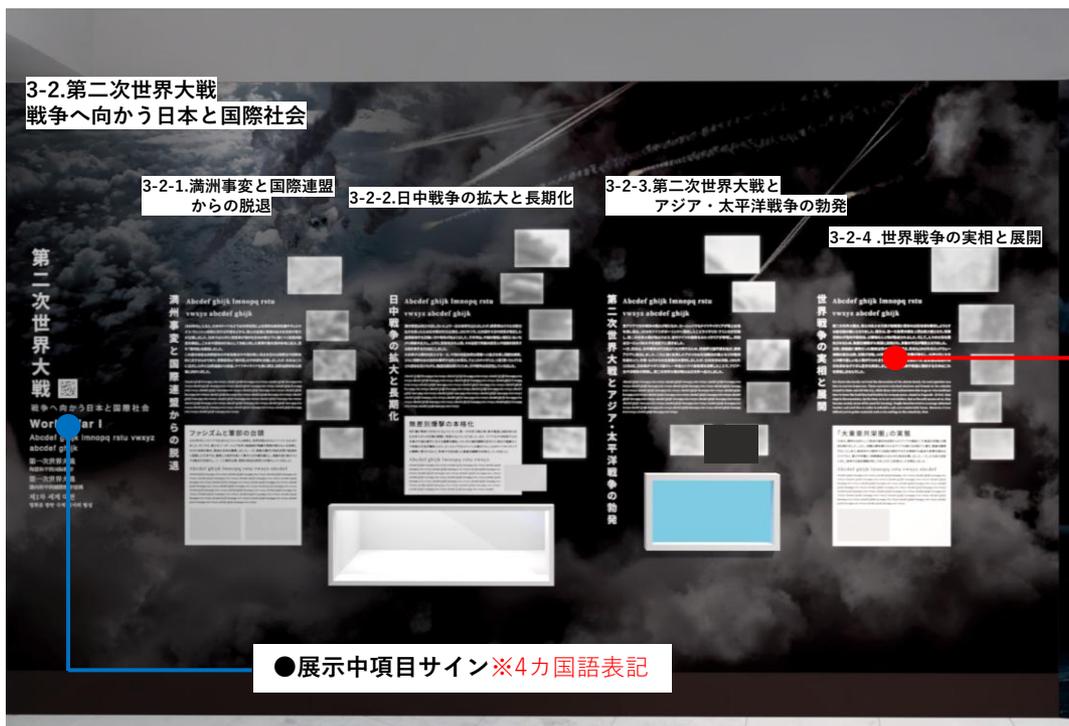
※資料展示や映像は必要に応じて配置
 (展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 3. 二つの世界大戦

3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と国際社会

【展示概要】

第一次世界大戦後の国際協調体制は、1930年代に入ると大きく揺らいでいった。1929年の世界恐慌以降、日本やドイツ、イタリアなどから国際社会の平和を脅かす動きが出てくる。日本では深刻な経済危機や政党政治の腐敗などを背景に軍部が台頭。満洲事変、国際連盟脱退、日中戦争と戦後の国際秩序から逸脱していく。さらにドイツとイタリアも日本の後に続き、ファシズムや軍国主義による政治を進める国々と民主主義を守ろうとする国々との対立は徐々に深化。国際社会は二度目の世界大戦へと向かっていった。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 3-2-1. 満洲事変と国際連盟からの脱退
展示手法/グラフィック・写真
(満洲事変と満洲国建国に関する写真、「大満洲国」のチラシなど)
- ・ 3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化
展示手法/グラフィック・写真・資料
(日中戦争における日本軍の写真、国内の戦時体制に関する写真やポスターなど)
- ・ 3-2-3. 第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発
展示手法/グラフィック・写真・映像
(ポーランドを侵攻するドイツ軍の写真、真珠湾攻撃で炎上する戦艦アリゾナの写真など)
- ・ 3-2-4. 世界戦争の実相と展開
展示手法/グラフィック・写真・資料
(連合国による空襲と破壊された街の写真、沖縄戦の写真など)

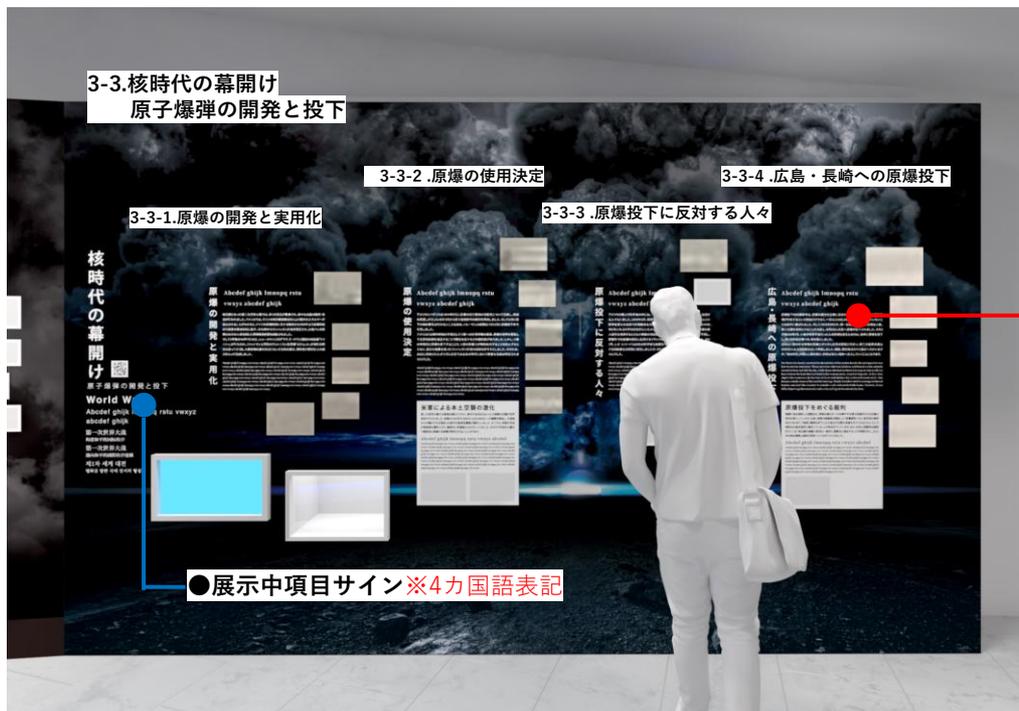
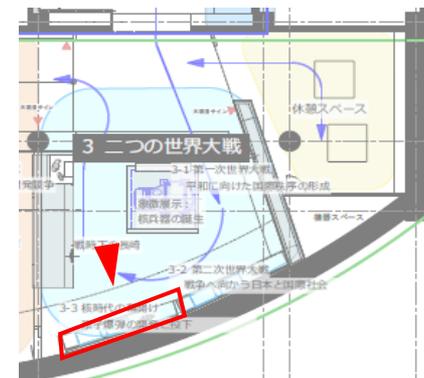
※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 3. 二つの世界大戦

3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下

【展示概要】

第二次世界大戦の開戦により世界が戦争に飲み込まれていく中で各国は核兵器の開発に乗り出し、第一次世界大戦後の国際秩序は完全に崩壊。アメリカも無差別爆撃や原爆の開発など国際法や人道に反する行為を実施していくことになる。そして広島・長崎に原爆が投下。日本の降伏により第二次世界大戦は終結したが、「核時代」は新たに幕を開け、世界は「冷たい戦争」に突入していく。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 3-3-1. 原爆の開発と実用化
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(モード委員会報告書の写真、トリニティ実験の映像、トリニタイトなど)
- ・ 3-3-2. 原爆の使用決定
展示手法/グラフィック・写真
(ルーズベルト大統領とチャーチル首相の写真、原爆投下命令書の写真など)
- ・ 3-3-3. 原爆投下に反対する人々
展示手法/グラフィック・写真
(ジョージ・マーシャルの写真、ジェームズ・フランクとフランクレポートの写真など)
- ・ 3-3-4. 広島・長崎への原爆投下
展示手法/グラフィック・写真
(原爆投下の目標とされた都市の図、原爆で壊滅した広島と長崎の写真など)

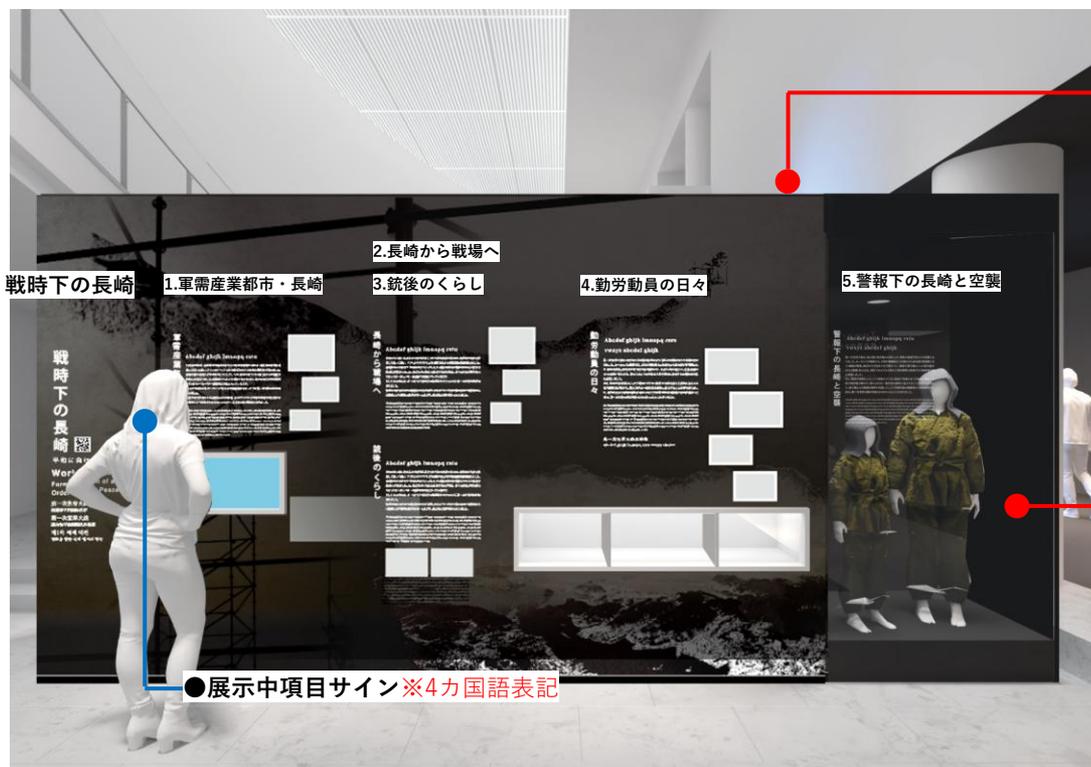
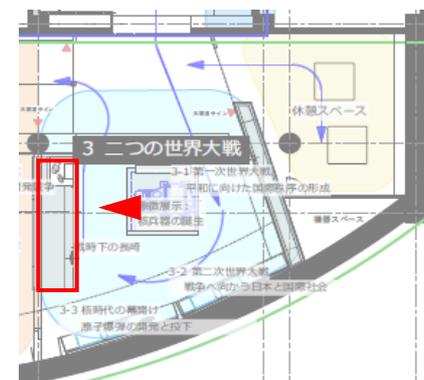
※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 3. 二つの世界大戦

戦時下の長崎

【展示概要】

総力戦体制下にあった長崎では、兵士だけでなく、戦場の後方にあたる銃後の国民も戦った。とりわけ、長崎市は軍需産業都市であり、魚雷や戦艦などもつくられていた。開戦当初、長崎市民にとって戦争の脅威は遠い場所にあったが、戦局の悪化につれて空襲が激化し、8月9日を迎えることになる。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- 1. 軍需産業都市・長崎
 展示手法/グラフィック・写真・映像
 (戦艦武蔵や九一式魚雷の写真、被爆前の長崎の街並みを写した映像など)
- 2. 長崎から戦場へ
 展示手法/グラフィック・写真・資料
 (長崎市内における出征風景の写真、千人針や恩賜の煙草など)
- 3. 銃後のくらし
 展示手法/グラフィック・写真・資料
 (大日本国防婦人会の写真、戦地に発送する慰問袋の写真など)
- 4. 勤労働員の日々
 展示手法/グラフィック・写真・資料
 (軍需工場に動員される学生の写真、学徒報国隊の腕章など)
- 5. 警報下の長崎と空襲
 展示手法/グラフィック・写真・資料
 (防空演習の写真、防空頭巾とモンペなど)

※資料展示や映像は必要に応じて配置
 (展示ケース:UVカットフィルム加工)

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

4. 核兵器の脅威

【ねらい】

核兵器の開発をめぐる複雑な歴史や国際情勢、そして近年、核兵器使用の危険性が高まっていることを伝えることで、誰もが核兵器が存在する世界に生きる当事者であると自覚してもらうとともに、被爆地をはじめ、世界の多くの人々が核兵器廃絶のための活動に取り組んでいることを知ってもらう。

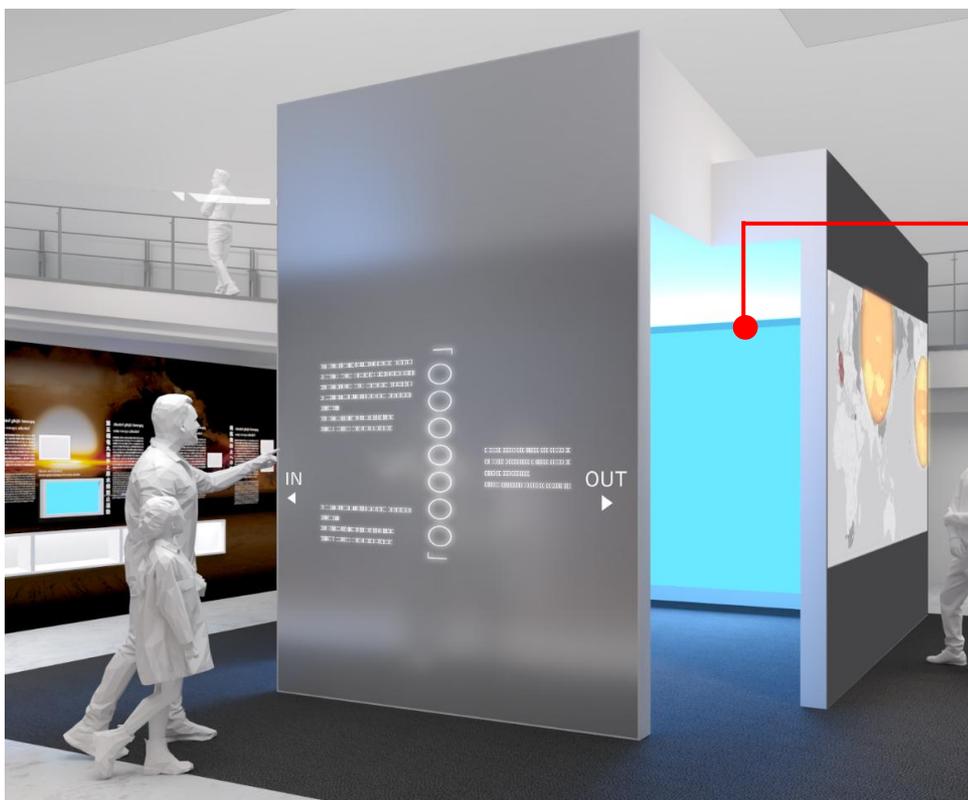


■ 4. 核兵器の脅威

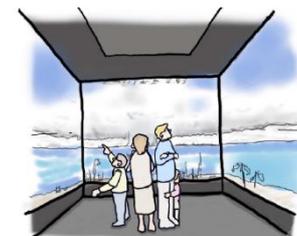
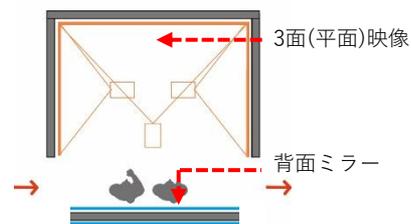
没入体験型展示：核実験映像によるイマーシブ体験

【展示概要】

1945年以降、2000回を超える核実験が行われた。多くの人々が被ばくし、現在でも深刻な健康被害を訴えている。また、地球環境にも甚大な被害を与えた。イマーシブ体験を通して、核実験が及ぼす影響を身近なものとしてとらえ、核兵器の問題に自ら向き合うための意識を涵養する。



・没入体験型展示：
核実験映像によるイマーシブ体験
展示手法/体験型映像



・内部映像イメージ

3面映像と背面のミラー
を組み合わせると没入感を
向上します。

■ 4. 核兵器の脅威

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

【展示概要】

第二次世界大戦後、世界の平和と安全の維持を目的に国際連合が発足した。一方で、米ソの対立は深刻化し、核軍拡競争がエスカレートしていく。世界各地で核実験が実施される中、第五福竜丸事件が起こり、核実験に反対する市民運動が広がる。政治レベルでは、キューバ危機により核戦争の危機に直面した。核戦争になれば、地球全体を破滅させることに気づき、核兵器を使用しないという認識が生まれ、核軍縮や核不拡散条約へとつながった。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・4-1-1. 原子力の国際管理の失敗
展示手法/グラフィック・写真・資料
(冷戦の構造を示す地図など)
- ・4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ
展示手法/グラフィック・写真・資料
(水爆実験の写真、世界終末時計に関する資料など)
- ・4-1-3. 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動
展示手法/グラフィック・写真・資料・模型
(第五福竜丸事件に関する資料、原水爆禁止世界大会の写真など)
- ・4-1-4. 世界が最も核戦争に近づいた日
展示手法/グラフィック・写真
(キューバ危機の写真など)
- ・4-1-5. 核拡散防止への取組み
展示手法/グラフィック・写真・資料
(核兵器廃絶への取組みに関する写真や資料など)

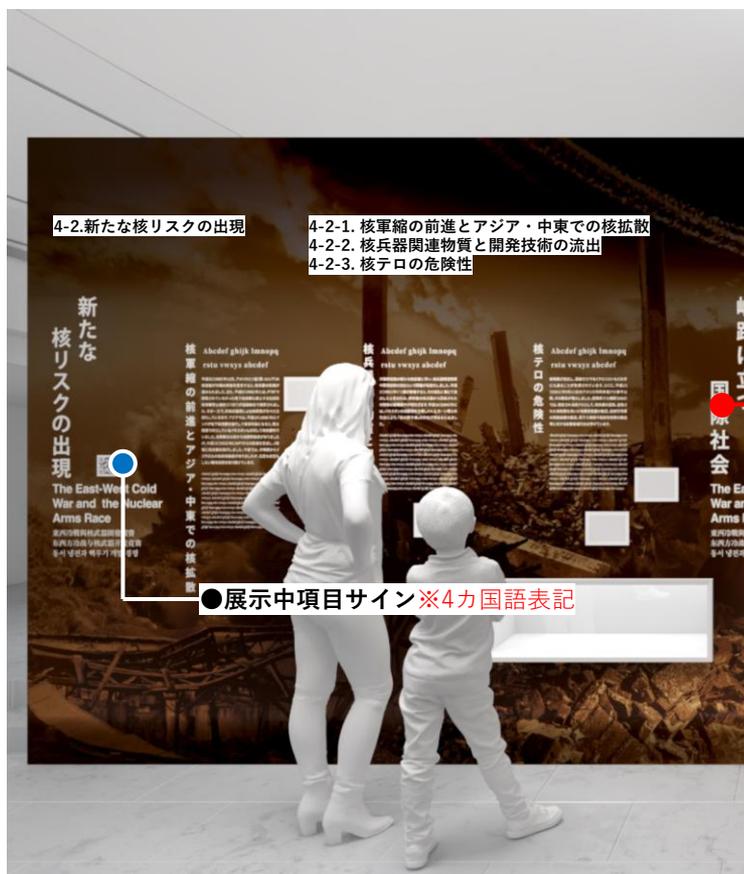
※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 4. 核兵器の脅威

4-2. 新たな核リスクの出現

【展示概要】

冷戦の終結と旧ソ連の崩壊に伴う核兵器開発技術の流出や、既存の核軍縮・不拡散政策に対する反発などを背景として、アジアと中東において核拡散が進み、さらには核テロのリスクが台頭した。一方で、核軍縮・核兵器廃絶に向けて努力が重ねられた。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- 4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散
展示手法/グラフィック・写真・資料
(新興核保有国の核開発に関する資料など)
- 4-2-2. 核兵器関連物質と開発技術の流出
展示手法/グラフィック
(核の闇市場に関する図など)
- 4-2-3. 核テロの危険性
展示手法/グラフィック・写真
(想定される核テロリズムの図など)

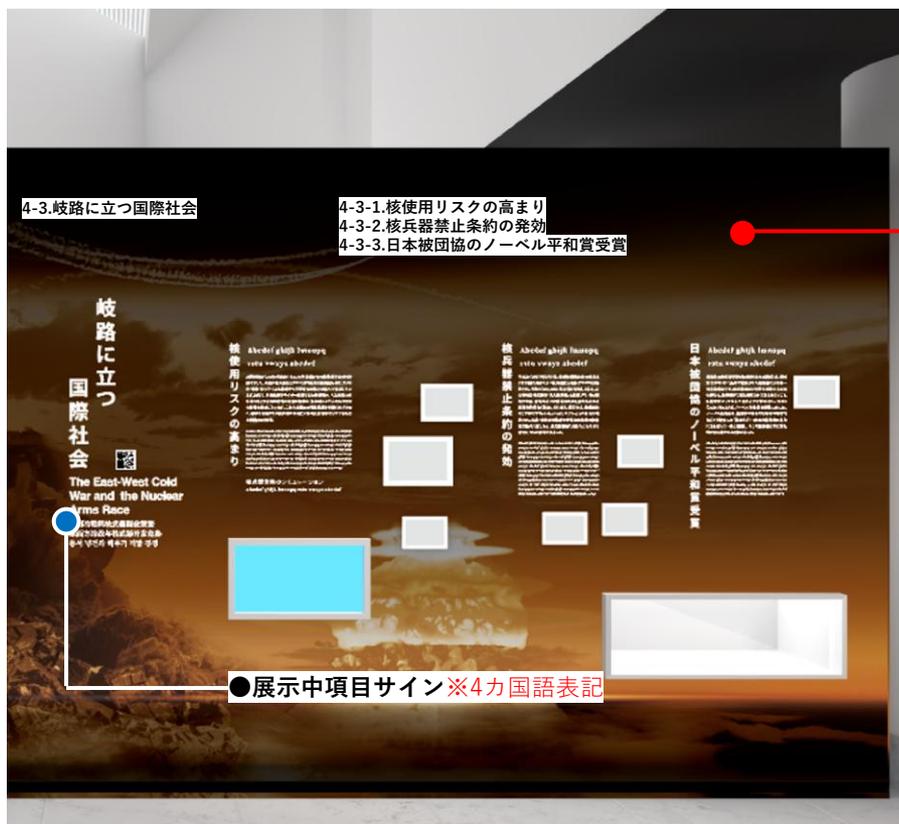
※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 4. 核兵器の脅威

4-3. 岐路に立つ国際社会

【展示概要】

ポスト冷戦期も過ぎ、大国間の核軍拡競争が再燃する。加えて、既存の国際秩序を変更しようという動きや、武力侵攻に核の脅しを用いる動きが現れ、核兵器使用のリスクが急速に高まっている。一方で、核兵器の非人道性に注目が集まり、核兵器禁止に向けた国際気運が増大している。2021年に核兵器禁止条約が発効し、2024年に日本被団協が「核兵器なき世界の実現」に努力したとしてノーベル平和賞を受賞した。



●展示中項目サイン※4カ国語表記

●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 4-3-1. 核使用リスクの高まり
展示手法/グラフィック・映像
(核兵器使用のシミュレーション、「核の脅し」を報じる新聞記事など)
- ・ 4-3-2. 核兵器禁止条約の発効
展示手法/グラフィック・写真・資料
(核兵器禁止条約の採択時の写真など)
- ・ 4-3-3. 日本被団協のノーベル平和賞受賞
展示手法/グラフィック・写真・資料
(ノーベル平和賞の授賞式の写真など)

※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

5. 長崎のあゆみ

【ねらい】

長崎の平和と核兵器廃絶に向けた取り組みが過去から現在に至るまで絶え間なく続いていることを示すことで、長崎市民の平和と核兵器廃絶に対する願いに共感してもらい、未来へ受け継いでもらう。



■ 5. 長崎のあゆみ

再現展示：爆心地とその周辺の復興ジオラマ

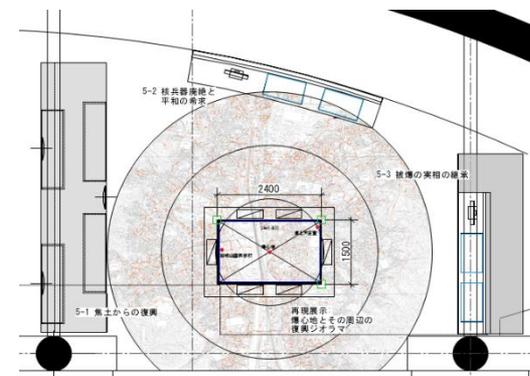
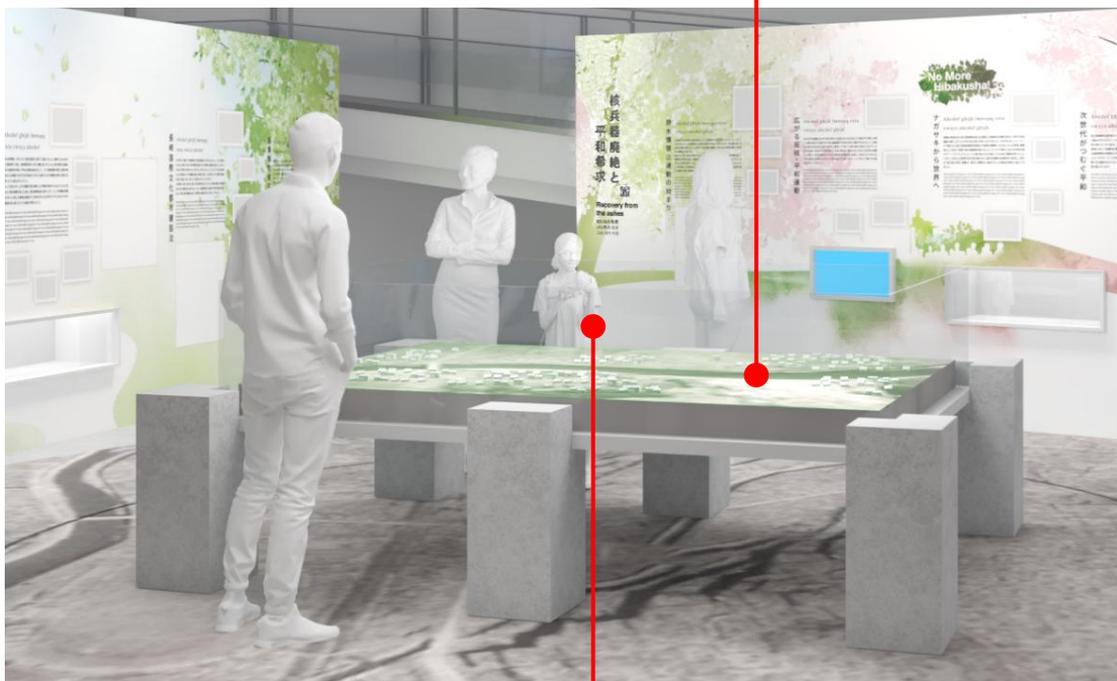
【展示概要】

平和祈念像や長崎国際文化会館が完成した1955年の爆心地周辺をジオラマで再現することで被爆から10年後の街の様子を知る。あわせてターゲットARで詳細情報を提供するとともに、現在の爆心地周辺を表示することで、焦土と化した長崎の街がどれほどの復興を遂げたのか知ってもらう。

・再現展示：爆心地とその周辺の復興ジオラマ

展示手法/原爆投下から10年が経過した爆心地付近の様子 縮小ジオラマ (S=1/400)

AR：被爆直後、1955年、現在の写真・映像比較



模型は縮尺1/400程度とし、旧城山国民学校と浦上天主堂が入るようにする。

・ターゲットAR

■ 5. 長崎のあゆみ

再現展示：爆心地とその周辺の復興ジオラマ
AR&VR：被爆直後、原爆投下から10年後（1955年）
現在の写真

<概要>

- ・QRコードを読み込むと、「原爆投下から10年後の爆心地付近のジオラマ」にARでポイントが表示され、被爆直後、10年後、現在の街の変化を検索する。
- ・ジオラマに対して4方向別のQRコードを設置。読み込むQRコードによって表示されるポイントが異なる。
- ・ARで表示されたポイントを押すと、写真・映像が表示される。
（各時代によって表示される写真が変化）
- ・ポイントは画面の定位置に表示されるため、ポイントがジオラマ内に表示されるように、体験者が端末をジオラマに合わせてかざす。
（ポイントを合わせるガイドとしてジオラマの外形が薄いラインで表示される）

<展開>



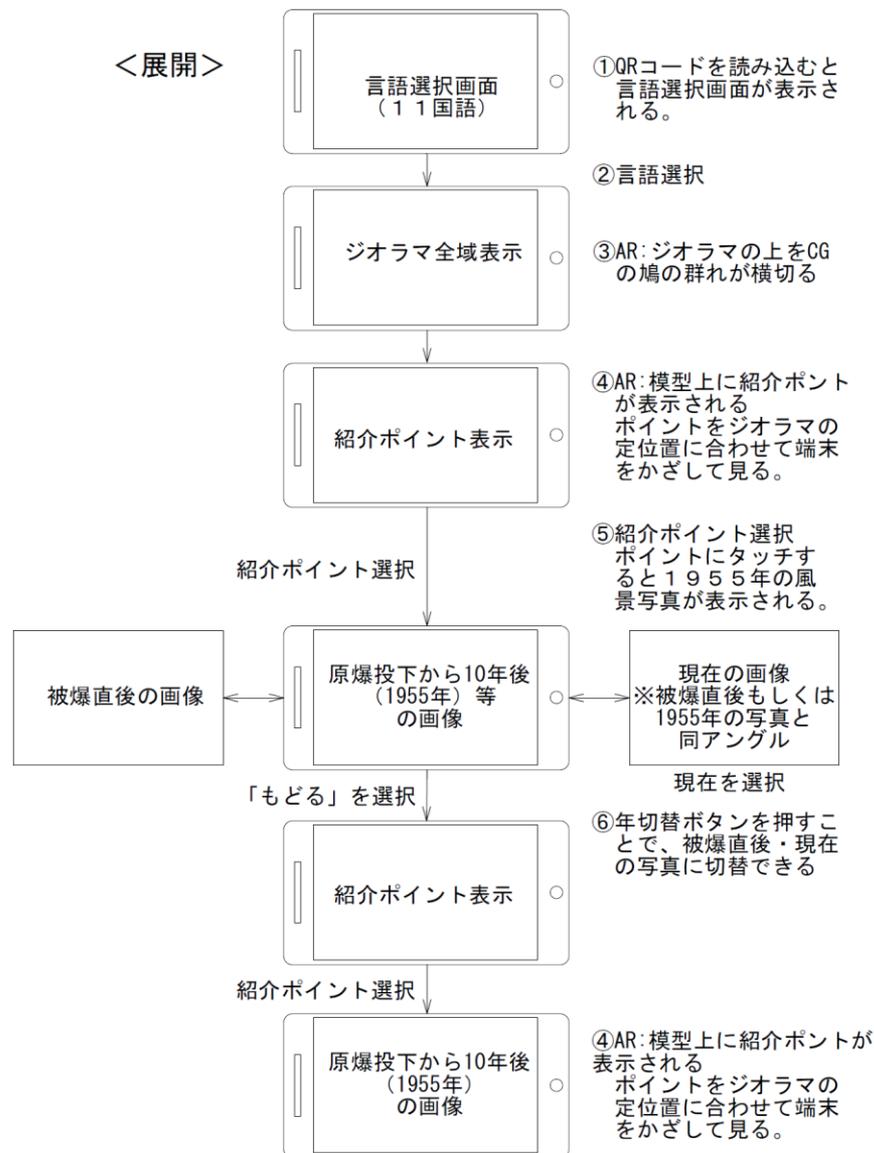
原爆投下から10年後の
爆心地付近のジオラマ S≒1/400

<ポイント候補>

- ・全景
- ・爆心地
- ・平和公園
- ・浦上天主教
- ・城山小学校
- ・山王神社の鳥居
- ・山王神社の大楠
- ・長崎医科大学
等 10ポイント

※全景と爆心地はどの方向（QRコード）にも含まれる

<展開>



■ 5. 長崎のあゆみ

5-1. 焦土からの復興

【展示概要】

長崎の街は原爆で焼け野原となり、「70年は草木も生えない」と言われたが、9月に入るとかすかに草木が芽生え、人々は生きる希望を見出した。やがて人々は、壊れた建物の木材などを集めて、寝起きができるほどの小屋を建て、街は少しずつ活気を取り戻していった。原爆により恐ろしい体験をした長崎市民は、平和に対する強い願いから「平和は長崎から」を合言葉に「恒久平和の理想」を達成する国際文化都市を目指してまちづくりを始めていった。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- 5-1-1. 被爆後の暮らし
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(焼け跡に建てられたバラックの写真、被爆後の街の様子を写した映像など)
- 5-1-2. 占領軍の駐屯と都市機能の復旧
展示手法/グラフィック・写真
(デルノア通りの看板を見るデルノア氏とキャサリンの写真、岩川町の戦災復興住宅の写真など)
- 5-1-3. 長崎国際文化都市建設法
展示手法/グラフィック・写真・資料
(長崎国際文化都市建設の平和宣言を行う長崎市長の写真、平和祈念像や長崎国際文化会館の写真など)
- 5-1-4. 原爆犠牲者の慰霊と平和祈念
展示手法/グラフィック・写真・資料
(原爆犠牲者慰霊並びに平和祈念式典の写真、平和宣言文など)

※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 5. 長崎のあゆみ

5-2. 核兵器廃絶と平和希求

【展示概要】

被爆から数年間はGHQのプレスコードにより原爆被害の実態が覆い隠されたため、被爆者は沈黙を強いられた。しかし、1954年の第五福竜丸事件をきっかけに原水爆禁止と被爆者援護を求める運動が起こり、長崎の被爆者は被爆体験と被爆者の実情を訴えることで運動に参加していった。こうした平和や核兵器廃絶を求める動きは市民や行政にも広がり、以来、長崎の人々は原爆被爆都市の使命として、核兵器の脅威を世界に訴え、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けて努力を続けている。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 5-2-1. 原水爆禁止運動の始まり
展示手法/グラフィック・写真・資料
(第2回原水爆禁止世界大会の写真、被爆体験を証言する被爆者の写真など)
- ・ 5-2-2. 広がる反核・平和運動
展示手法/グラフィック・写真
(平和首長会議や非核宣言自治体協議会の写真、長崎平和推進協会やながさき平和大会の写真など)
- ・ 5-2-3. ナガサキから世界へ
展示手法/グラフィック・写真・映像
(国連で演説する山口仙二さんの映像、海外原爆展の写真など)
- ・ 5-2-4. 次世代がつむぐ平和
展示手法/グラフィック・写真
(高校生平和大使の写真、高校生1万人署名活動の写真、ナガサキ・ユース代表団の写真など)

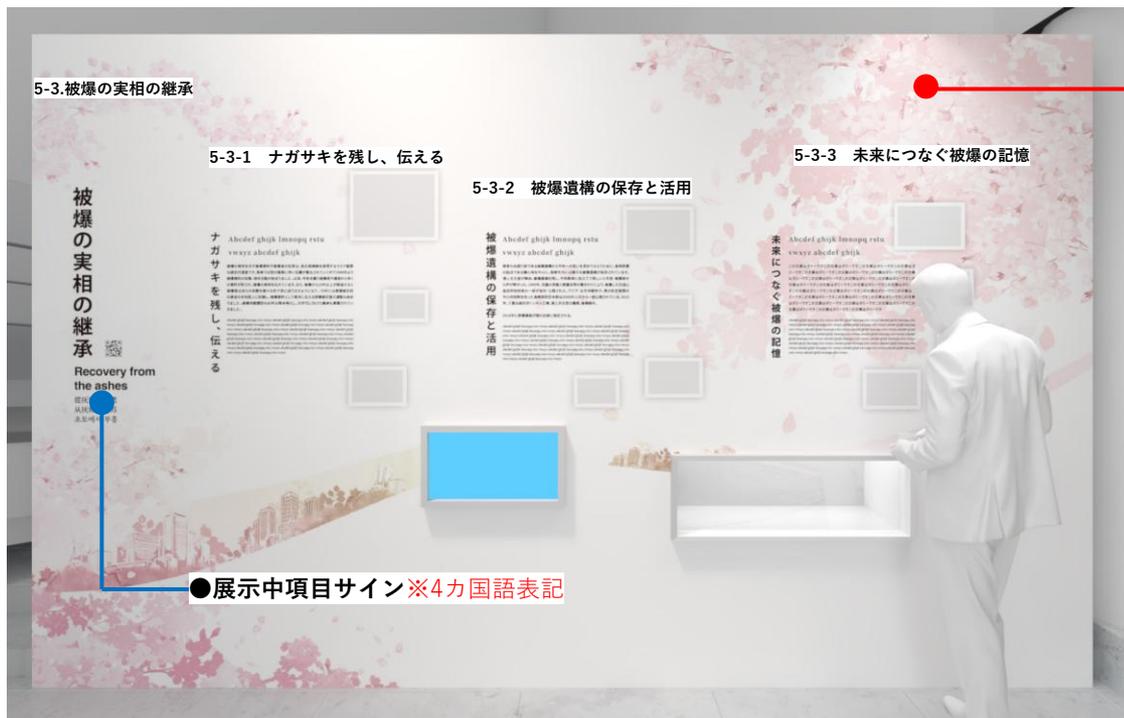
※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ 5. 長崎のあゆみ

5-3. 被爆の実相の継承

【展示概要】

長崎市では、街の復興が進み、市内の瓦礫が片付けられていく中で、貴重な被爆資料が撤去されていく状況に懸念が高まり、1949年より被爆資料の収集・保存活動が始まった。さらに原水爆禁止運動の盛り上がりや戦争を知らない世代の増加等を背景として、様々な形で被爆体験を記録し、後世へ残そうとする動きが活発になっていった。こうした被爆者や遺族の活動は若い世代に受け継がれ、現在に至っている。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- 5-3-1. ナガサキを残し、伝える
展示手法/グラフィック・写真・資料
(長崎市原爆資料館(通称:六角堂)の写真、長崎の証言の会『長崎の証言』など)
- 5-3-2. 被爆遺構の保存と活用
展示手法/グラフィック・写真・映像
(被爆遺構や被爆樹木の写真など)
- 5-3-3. 未来につなぐ被爆の記憶
展示手法/グラフィック・写真
(家族・交流証言者や青少年ピースボランティアの写真など)

※資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

■ スロープ壁面

世界のヒバクシャなどに関する展示

【展示概要】

冷戦期を通じて、世界では2,000回以上の核実験が繰り返され、住民の強制移住や健康被害が地球規模で広がった。核実験の歴史、核実験国と核実験場の関係性、多くの被害者を生み出しながらも核開発が続いた背景などを読み解きながら、「核兵器の非人道性」や「核兵器と人類は共存できない」ことをあらためて訴える。

展示手法/グラフィック・写真
 (核実験の被害者に関する写真など)

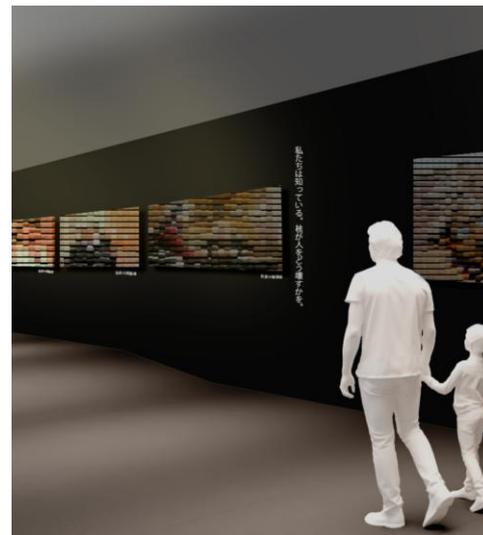


長崎の被爆者などに関する展示

【展示概要】

「復興」という言葉では表せない被爆者の苦しみや悲しみ、そこから核兵器廃絶や平和に向けて立ち上がっていった様子など原爆の被害に遭った人々を写した印象的な写真と言葉から「あの日」長崎にいた一人ひとりの過去から現在までの生き様を伝え、その想いを来館者に受け継いでもらう。

展示手法/グラフィック・写真
 (原爆の被害に遭った人々の戦後のライフストーリーを表す写真や言葉、被爆者と若い世代が協同している写真など)

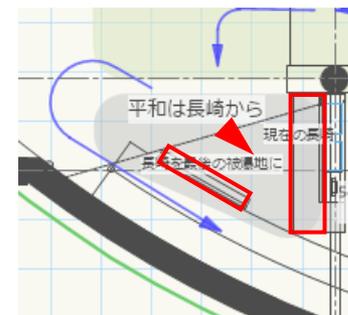


既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。



平和は長崎から 【ねらい】

最後にあらためて「長崎を最後の被爆地に」のメッセージを共有してもらう。

●長崎を最後の被爆地に

展示室の最後に「長崎を最後の被爆地に」を世界各国の言語で表示することで心に刻んでいただく。



既存ゾーン名

D. ビデオルーム

【ゾーンの目的】

来館者が自ら平和のためにできることを考え、行動するきっかけを作る。

情報メディアコーナー

【ねらい】

常設展示や企画展を見て平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動できる心を育む。

- ビデオルーム
- 情報メディアコーナー

様々なメッセージ、被爆者の証言、平和団体の活動に触れることで、平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動したり、発信したりするきっかけをつかむ。



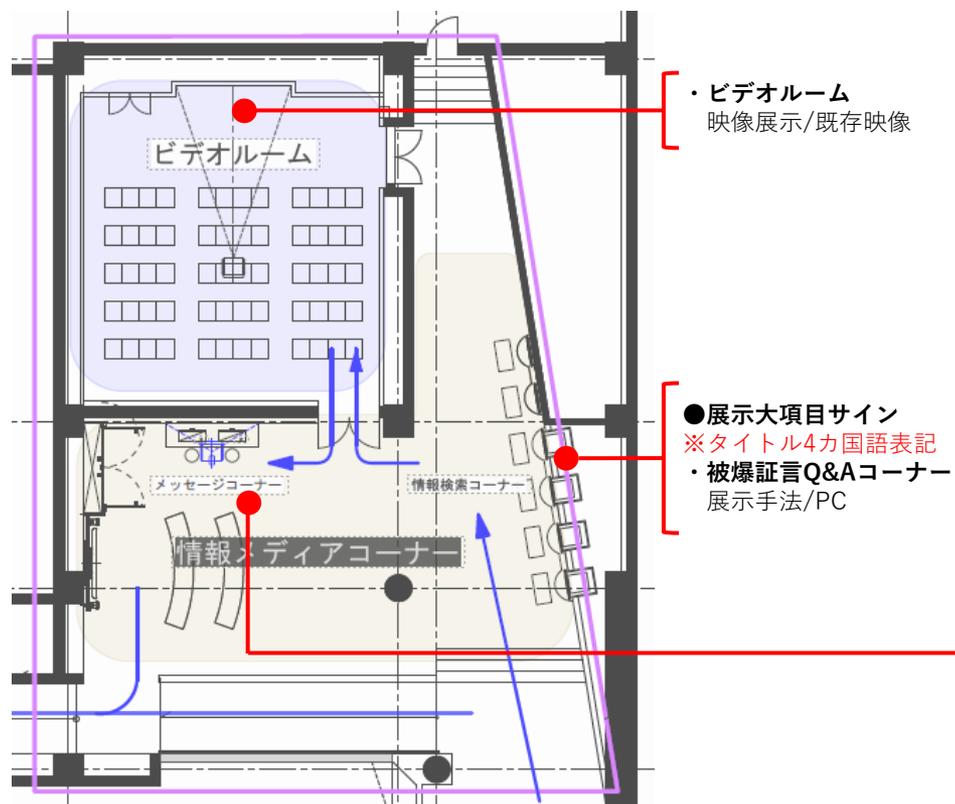
■ 情報メディアコーナー

ビデオルーム/情報メディアコーナー

【展示概要】

- ・ビデオルーム
- ・情報メディアコーナー

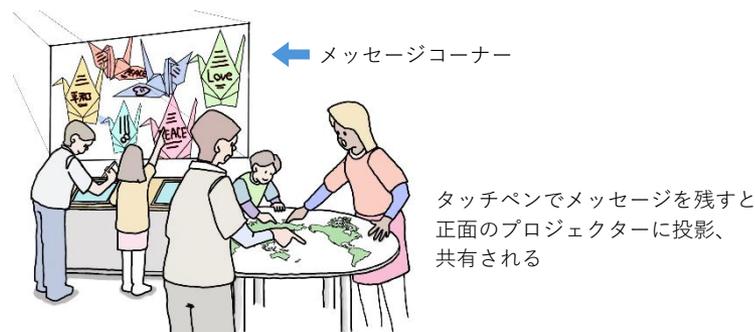
来館者がメッセージを残し、平和に対する想いを共有するスペースを設置する。



メッセージコーナー

展示を見た来館者や子どもたちの想いを蓄積・共有

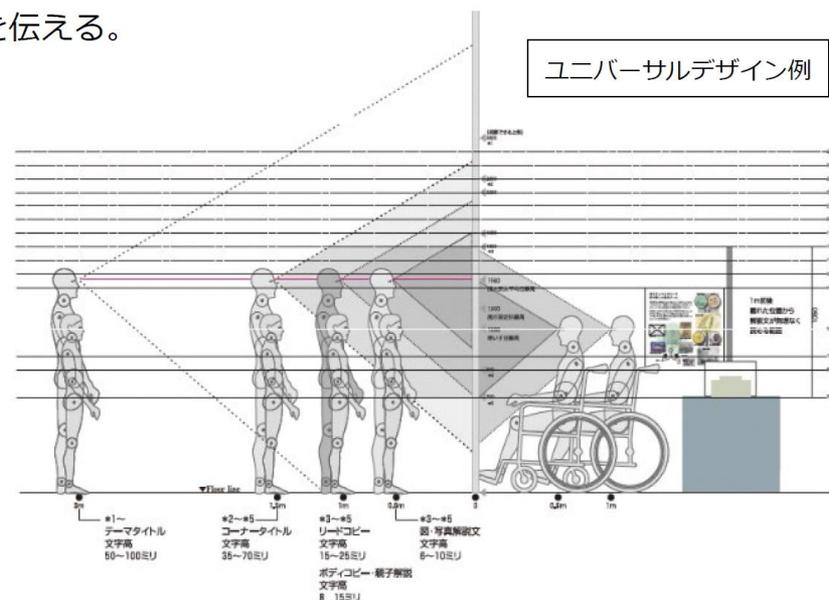
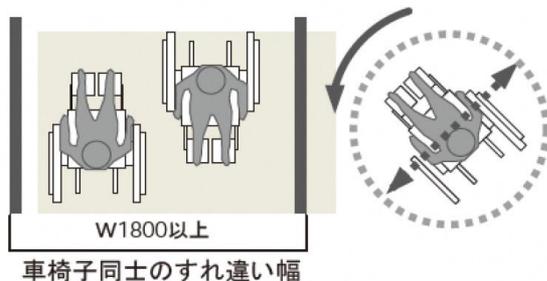
展示を通して子どもたちが感じた想いやメッセージを大型映像で投影します。
核兵器の使用リスクが高まっている現在、海外の来館者の想いも共有することで、自ら平和を考えるきっかけを作ります。



◆年齢や障がいの有無、言語などにかかわらず、多くの人利用可能なデザインの採用
 (高齢者、身障者、外国人など見学者への配慮)

- 海外の方を含め、多様な人が訪れる施設として、ユニバーサルデザインの考え方に基づく施設づくりを推進する。
- わかりやすい動線、通路幅の確保など、より快適で安全に移動できる空間づくりを行う。
- 来館者の博物館疲労を軽減するため、適切な箇所に休憩スペースを用意する。
- わかりやすい館内サイン、読みやすい解説パネル、多言語での対応など、だれもが容易に理解でき、行動できる表示を行う。

- ・身長差などを考慮した視覚範囲内での展示を基本とする。
- ・視覚に障がいのある方に対しては、点字による解説等を導入する。
- ・弱視の方にも認識しやすいUDフォントの採用、適切な文字の大きさ、分量に配慮する。
- ・色弱の方にも判別しやすい色、アウトラインの採用で的確に内容を伝える。
- ・聴覚障がいのある方に対しては、テロップ等で内容を伝える。



- 施工中の来館者への配慮、安全確保を確実にし、翌朝の開館に支障のない施策を施します

対応方針

- 施工計画書を提出し、定期的な連絡のもと、現場施工の予定や報告を確実に行う。
- 来館者への安全確保、騒音、粉塵、臭いの対策として、作業は夜間工事で行う。
- 臭いの残る揮発成分を含む仕上げ材は極力使用しない。
- 作業時は養生シートを使用し、粉塵が作業区画から出ないように対策する。併せて、作業終了時の清掃を徹底する。
- 仮設パネルには、リニューアルオープンの情報などを掲示し、期待感を醸成することで来館者の再訪を促します。
- 来館者が見学できないコーナーを減らすべく、一斉に全コーナーの区画は行わず、状況に合わせて段階的に区画して作業を行う。



仮囲い参考

展示概要案・解説パネル原稿案(修正版)

● 展示概要案 ※中間報告までにお示ししていない各項目の概要案

1	Bコーナー	2
	2-9 救援・救護活動 2-10 被爆者と遺族の戦後	
2	Cコーナー	3
	中項目 戦時下の長崎 大項目 長崎のあゆみ	
3	Cコーナー (スロープ壁面)	8
	中項目 世界のヒバクシャなどに関する展示	
	中項目 長崎の被爆者などに関する展示	

● 解説パネル原稿案 (修正版) ※中間報告にお示ししていた解説パネル原稿案の修正版 (赤字部分)

4	Bコーナー「放射線による被害」	9
5	Cコーナー「二つの世界大戦」	13
6	Cコーナー「核兵器の脅威」	21

1 Bコーナー「救援・救護活動」「被爆者と遺族の戦後」展示概要案

2-9. 救援・救護活動

2-9-1. 混乱と慟哭の中で

瓦礫の山と化した長崎では、おびただしい数の負傷者が助けを求めた。しかし、長崎医科大学(現・長崎大学医学部)は壊滅状態となり、かろうじて倒壊を免れた浦上第一病院(現・聖フランシスコ病院)が被爆直後の医療拠点となった。やがて惨状を伝え聞いた周辺の町から救援隊が派遣され、救援列車も運行された。想像を絶する惨状の中、被爆者の救援・救護に携わった人々の活動を実物資料や写真とともに振り返る。

資料候補

・救護所で使用された医療器具

2-9-2. 永井隆博士

永井博士は、放射線医学への従事により慢性骨髄性白血病を発症し、余命 3 年と診断された 2 か月後に長崎医科大学(現・長崎大学医学部)で被爆する。自宅にいた妻を亡くし、自身も右側頭動脈切断の重傷を負ったが、被爆直後から負傷者の救護に奔走した。病床に伏してから、やがて孤児の運命にあらう二人の子どもたちを案じながら、命の限り執筆活動を続けた。医師として、文筆家として、そして父として奮闘した永井博士の足跡を紹介する。

資料候補

・永井隆博士の写真や遺品

2-10. 被爆者と遺族の戦後

2-10-1. 身体的・精神的な苦しみ 2-10-2. 大切な人を失った悲しみ 2-10-3. 生活における困難 2-10-4. 社会的な差別と偏見

8月9日を生き延びた被爆者であったが、家族との突然の別れ、生活再建と経済的困窮、就職や縁談での差別・偏見、そして放射線起因の疾患の発症など幾重もの苦難に直面した。それらとどのように向き合い、終わらない戦後を生き抜いてきたのか、唯一無二である個人の被爆体験と寄贈資料から紐解いていく。

資料候補

・後遺症やトラウマを抱える人々に関する資料
・家族や友人を亡くした人々に関する資料
・原爆孤児や孤老、貧困にあえぐ人々に関する資料
・就職や結婚の際に不当な扱いを受けた人々に関する資料

2 Cコーナー「戦時下の長崎」「長崎のあゆみ」展示概要案

戦時下の長崎

1.軍需産業都市・長崎

江戸時代、外交・貿易の公的な窓口として栄えた長崎は、近代に入ると造船や水産業などに力を入れる一方、対外戦争における兵士の出撃基地や軍需物資の供給基地としても機能し、軍需工場が立ち並んだ長崎の街では戦艦や魚雷などが製造されたことを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・戦艦武蔵や九一式魚雷の写真
- ・被爆前の長崎の街並みを写した映像 など

2.長崎から戦場へ

日中戦争以降、兵士の数が不足すると大勢の男性が戦地に送られるようになり、県内出身者の多くが所属した大村連隊は、日中戦争で満洲の治安維持に当たるほか中国各地を転戦し、アジア・太平洋戦争では多くの戦没者を出したことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・長崎市内における出征風景の写真
- ・戦死者の市葬の写真
- ・千人針や恩賜の煙草 など

3.銃後の暮らし

総力戦となった日中戦争とアジア・太平洋戦争では、戦闘に参加しない女性や子どもも「銃後」と呼ばれる戦争支援体制に組み込まれ、代用品の使用や金属供出、戦費調達に向けた貯蓄や国債購入など日々の暮らしから戦争を支えたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・大日本国防婦人会の写真
- ・戦地に発送する慰問袋の写真
- ・戦時貯蓄債券や戦時郵便貯金切手 など

4.勤労働員の日々

軍需物資や食料の増産が銃後の国民の重要な勤めとされる中、戦時下の労働力不足を補うため、女性や学生が工場などに動員されるだけでなく、外国人も労働に従事させられたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・軍需工場に動員される学生の写真
- ・畑で勤労奉仕に従事する学生の写真
- ・軍需工場に動員された学生の日記や学徒報国隊の腕章 など

5.警報下の長崎と空襲

戦況の悪化に伴い、日本本土への空襲が本格化する中、長崎でも防空壕づくりや建物・人員疎開などが実施される一方、原爆投下直前の7月末から8月上旬にかけて多くの市民が働く工場が空襲を受けたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・防空演習の写真
- ・空襲で破壊された工場の写真
- ・エマル消火弾・陶製防砂袋
- ・防空頭巾とモンペ など

5.長崎のあゆみ

5-1.焦土からの復興

5-1-1.被爆後のくらし

多くの人々が家を焼かれ、家族を失い、食糧や物資が不足する中で不自由な生活を送る一方、生命が息吹く様子に生きる希望を見出し、自らの生活を再建するとともに街の復興に向けて動き出していったことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・焼け跡に建てられたバラックの写真
- ・新芽が出始めた大クスの写真
- ・被爆後の街の様子を写した映像 など

5-1-2.占領軍の駐屯と都市機能の復旧

長崎に進駐軍が駐屯し、県や市とともに焼け野原の瓦礫の撤去や道路等の復旧、学校の再建が行われる一方、資材・資金不足で住宅建設が思うように進まない中、長崎市が戦災復興事業に着手したことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・米海兵隊兵士に群がる子供たちの写真
- ・デルノア通りの看板を見るデルノア氏とキャサリンの写真

・岩川町の戦災復興住宅の写真 など

5-1-3.長崎国際文化都市建設法

1949(昭和 24)年 5 月、国会で「長崎国際文化都市建設法」が可決され、「国際文化の向上を図り、恒久平和の理想を達成する」平和都市の建設に向けて、市内全域とりわけ原爆で壊滅した浦上の再生に向けて街づくりが進められたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・長崎国際文化都市建設の平和宣言を行う長崎市長の写真
- ・復興した爆心地周辺の写真
- ・平和祈念像や長崎国際文化会館の写真 など

5-1-4.原爆犠牲者の慰霊と平和祈念

終戦1か月後から市内各所で慰霊祭が行われ、長崎市も復興祭や文化祭を開催する一方、1952(昭和 27)年より現在の式典の原型となる「原爆犠牲者法要並びに平和祈念式典」が始まり、毎年 8 月 9 日が原爆犠牲者の霊を慰め、平和を祈念する大切な日となっていったことを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・原爆犠牲者慰霊並びに平和祈念式典の写真
- ・平和宣言文 など

5-2.核兵器廃絶と平和希求

5-2-1.原水爆禁止運動の始まり

1954(昭和 29)年の第五福竜丸の被ばくをきっかけに核兵器の禁止を目指す運動が盛り上がり、長崎でも第2回原水爆禁止世界大会の開催を機に平和団体の組織化が進み、被爆者も原水爆の禁止と被爆者の救済を求めて運動を開始したことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・第 2 回原水爆禁止世界大会の写真
- ・被爆体験を証言する被爆者の写真 など

5-2-2.広がる反核・平和運動

60 年代後半から市民や NGO を主体とした動きが台頭し、多様な視点や行動方式で核兵器廃絶や平和を目指す活動が行われる中で、長崎平和推進協会の設立やながさき平和大集会の開催など市民の誰もが平和を考え、行動できる場が生まれたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・平和首長会議や非核宣言自治体協議会の写真
- ・長崎平和推進協会やながさき平和大会の写真 など

5-2-3.ナガサキから世界へ

被爆の実相を伝え、核兵器廃絶を訴える活動が 70 年代末以降世界へ広がり、山口仙二さんが被爆者として初めて国連で核兵器廃絶を訴えたことや長崎市長が核兵器の非人道性を国際司法裁判所で証言したことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・国連で演説する山口仙二さんの映像
- ・海外原爆展の写真
- ・国際司法裁判所にて陳述する長崎市長の写真 など

5-2-4.次世代がつむぐ平和

被爆者の高齢化が進む中、高校生平和大使や高校生 1 万人署名活動、ナガサキ・ユース代表団など若い世代によって平和や核兵器廃絶に向けた様々な取り組みが行なわれていることを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・高校生平和大使の写真
- ・高校生 1 万人署名活動の写真
- ・ナガサキ・ユース代表団の写真 など

5-3.被爆の実相の継承

5-3-1.ナガサキを残し、伝える

被爆から数年経った頃から被爆の惨状を示す被爆資料の収集・保存活動が始まったことや長らく被爆者の証言が集められてきたほか、被爆前の家並みを地図上に記録し、被爆資料として後世に伝える原爆被災復元運動などが行われたことなどを紹介する。

資料・グラフィック候補

- ・長崎市原爆資料館(通称:六角堂)の写真
- ・長崎の証言の会『長崎の証言』

・原爆被災復元運動に関する資料 など

5-3-2.被爆遺構の保存と活用

浦上天主堂のように解体・撤去された被爆遺構もある一方で、旧城山国民学校校舎や長崎県防空本部、三菱兵器住吉トンネル工場、被爆樹木など長崎市内には様々な被爆遺構が保存し、公開されていることを紹介する。

資料・グラフィック候補

・被爆遺構や被爆樹木の写真 など

5-3-3.未来につなぐ被爆の記憶

被爆者の高齢化が進み、被爆者から直接話を聞くことが難しくなりつつある中で、家族・交流証言者や青少年ピースボランティアの育成など様々な形で被爆の実相や戦争の歴史を学び、後世に伝える活動が行われていることを紹介する。

資料・グラフィック候補

・家族・交流証言者や青少年ピースボランティアの写真など

3 Cコーナー(スロープ壁面)展示概要案

世界のヒバクシャなどに関する展示

世界のヒバクシャなどに関する展示

冷戦期を通じて、世界では 2,000 回以上の核実験が繰り返され、住民の強制移住や健康被害が地球規模で広がった。核実験の歴史、核実験国と核実験場の関係性、多くの被害者を生み出しながらも核開発が続いた背景などを読み解きながら、「核兵器の非人道性」や「核兵器と人類は共存できない」ことをあらためて訴える。

資料候補

・核実験の被害者に関する写真

長崎の被爆者などに関する展示

長崎の被爆者などに関する展示

「復興」という言葉では表せない被爆者の苦しみや悲しみ、そこから核兵器廃絶や平和に向けて立ち上がっていった様子など原爆の被害に遭った人々を写した印象的な写真と言葉から「あの日」長崎にいた一人ひとりの過去から現在までの生き様を伝え、その想いを来館者に受け継いでもらう。

資料・グラフィック候補

- ・原爆の被害に遭った人々の戦後のライフストーリーを表す写真や言葉
- ・現在の被爆者と若い世代が協同している写真 など

※資料やグラフィックは、今後の検討状況によって適宜更新する。

4 B コーナー「放射線による被害」解説パネル原稿案

2-8. 放射線による被害

2-8-1. 原子爆弾と放射線

原子爆弾は従来の火薬による爆弾とは異なり、人体に深刻な影響が及ぶ放射線を放出しました。放射線によって傷ついた細胞は、修復過程で遺伝子に突然変異が生じ、時間の経過とともに白血病やがんなどを引き起こす場合があります。そのため、原爆投下時に一命を取りとめることができたとしても、被爆者は生涯にわたって不安を抱えながら生き続けなければなりません。

2-8-2. 初期放射線と残留放射線

原爆放射線には、初期放射線と残留放射線の二通りがあります。初期放射線は原爆のさく裂から 1 分以内に放出されたもので、透過力の強いガンマ線や中性子線が人体の細胞を破壊しました。一方で、残留放射線には、土壌や建造物が中性子線を浴びることで放射化する誘導放射線と、放射性物質を含む粉塵が雨とともに地上へ降下する放射性降下物(フォールアウト)があります。残留放射線は、体の外から放射線を浴びる外部被ばくに加え、汚染された空気や食べ物を体内に摂取して起こる内部被ばくの原因にもなります。それにより、原爆投下直後に被爆者の救護や肉親の捜索で入市した人々も被爆しました。

グラフィック候補

- ・放射線の種類と性質
- ・初期放射線と残留放射線の模式図

2-8-3. 被ばく線量と人体への影響

人体に入り込んだ放射線の量は被ばく線量といわれ、その量が多いほど重症化しやすくなります。**一般的に**、被ばく線量が 500 ミリシーベルトを超えると白血球が減少し、1,000 ミリシーベルト以上になると自覚症状が現れ、**7,000** ミリシーベルトで致死量に至るとされます。長崎では、爆心地から 1 キロメートル離れた遮蔽物のない屋外で放射線を浴びた場合、ガンマ線だけでも 8,620 ミリシーベルトに達しました。同じ被ばく線量の場合、局所被ばくよりも全身被ばくの方が影響は大きくなります。また、骨髄や腸管、皮膚などは、細胞分裂が活発で放射線に対する感受性が高いため、影響を受けやすくなっています。

グラフィック候補

- ・放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図

2-8-4. 急性障害と後障害

放射線が及ぼす障害は、早期に現れる急性障害と年月を経て発生する後障害に分類されます。被爆直後は、全身の倦怠感や嘔吐、発熱、下痢、脱毛、皮下出血などの様々な急性障害が現れました。軽症の場合は回復に向かいましたが、火傷や外傷、**医薬品の不足**も相まって、衰弱死する被爆者が後を絶ちませんでした。また、被爆から 4 か月を過ぎると火傷跡にケロイド、2 年後には白血病、10 年程度で固形がん(**血液がん以外**)などの後障害が発生します。さらに、放射線は被爆者の身体を蝕むだけでなく、精神面にも大きな影響を与えました。これまでの調査で、被爆者には心的外傷後ストレス障害(PTSD)の症状が多く見られることが分かっています。

資料候補

- ・脱毛や皮下出血などの写真
- ・急性障害で亡くなった被爆者に関する資料

グラフィック候補

- ・白血病と固形がんの模式図
- ・被爆時の年齢と性別に基づく生涯リスクの表

2-8-5. 胎内被爆

この世に生を受けていない、母親のおなかの中にいた胎児も被爆しました。とくに、妊娠 8 週目から 15 週目に大量の放射線を浴びた場合、原爆小頭症や重度の知的障害を伴うリスクが高くなります。流産や死産に加え、新生児や乳児の死亡率も増加しており、母子ともに放射線の影響は免れませんでした。

資料候補

- ・被爆した妊婦が後年に描いた絵画
- ・小頭症患者の写真

2-8-6. 遺伝的影響

被爆者の子どもへの遺伝的影響は、当時から最も心配されていたことのひとつです。これまでに、出生時の障害や染色体異常、がん、生活習慣病などに関する大規模な調査が行われてきました。現在のところ、いずれの調査においても**有意差は認められていません**。しかし、健康面での不安を訴える被爆二世・三世は多く、**影響も完全には否定できていないことから**、引き続き調査を見守っていく必要があります。

2-8-7. 被爆医療の取組み

身体的・精神的に疲弊した被爆者を救うため、被爆医療に従事してきた医師や研究者がいます。彼らは被爆者一人ひとりに寄り添いながら、

放射線が人体に及ぼす影響を調査し続けました。そうした取組みによって、終わらない原爆後障害の実態が明らかになりつつあります。

2-8-8. 医学的調査の始まり

放射線の影響に関する調査は、原爆投下から間もない **1945(昭和 20)年** 10 月に開始されました。中心となったのは、長崎医科大学(現・長崎大学医学部)の調来助教授です。調教授は原爆で二人の息子を亡くし、自らも被爆して体調不良に苦しみましたが、医師として被爆者の治療を行うかたわら、生き残った医師や学生たちとともに約 5,800 人の症状を調査・記録しました。そして、被爆者の死亡率や死亡時期、外科的損傷、放射線病について論文にまとめています。これらは、人類が初めて経験した全身被爆に関する研究の出発点となりました。

グラフィック候補

- ・調教授の手記
- ・放射線による障害の図表

2-8-9. 被爆医師の証言

朝長万左男さん

(朝長先生の略歴や血液内科医としての研究や診療、平和運動への取組みなどを紹介)

最も印象に残る言葉は、30 歳ぐらいで子どももできて、家庭もつくった揚げ句に、76 歳ぐらいになって発病した人が、「やっぱり原爆は自分の体の中に生き続けていたんですね」と言ったこと。ほんとに確信した人はそういうことを言いますね。それは 2 つのことを意味してるわけで、ひとつは、ほんとに医学的な意味で白血病の原因が(体の中に)巣くってた。もう一つは、何ていうかな、それだけ不安がずっと続いてたっていうことを告白してるわけですね。いつかは原爆の影響が出るんじゃないか、それが今回、白血病になって出てきたということですね。

長崎原爆の戦後史をのこす会編『原爆後の 75 年：長崎の記憶と記録をたどる』書肆九十九 2021 より

資料候補

- ・朝長先生の証言映像

2-8-10. 人体影響の生涯持続性

放射線の影響が生涯続く可能性を示唆したのが、骨髄異形成症候群(MDS)の出現です。MDS は正常な血液細胞が作られにくくなる病気で、白血病の前段階と考えられています。

1970 年半ば(昭和 50 年頃)、白血病は収束に向かうとの考えが広まっていました。しかし、被爆者の高齢化とともに発症が相次いだことから、被爆により血液の元となる造血幹細胞が傷つけられ、**加齢に伴って**白血病を誘発している可能性があると考えられるようになります。

2004(平成 16)年には、長崎の被爆者を対象とした MDS の研究体制が本格的に始動しました。長崎大学原爆後障害医療研究所と放射線影

響研究所長崎研究所の合同調査では、当時 20 歳未満だった被爆者の MDS 発症率が、被爆していない人に比べて 3.8 倍も高いことが明らかになっています。

また、MDS だけでなく、一部の固形がんも発症率の増加が続いており、原爆後障害の発生リスクは「生涯持続性」として認識されるようになりました。一瞬の被爆による影響が、生涯にわたって被爆者の健康を脅かしているのです。

グラフィック候補

・MDS の増加を示す図表

5 C コーナー「3. 二つの世界大戦」解説パネル原稿案

3-1 第一次世界大戦—平和に向けた国際秩序の形成

小項目:3-1-1.世界戦争への道

19世紀末以降、産業革命で経済成長をとげた欧米諸国や日本は、植民地の獲得を目指して互いに競い、アフリカやアジアなどを植民地化する帝国主義政策を進めました。各国は様々な努力で平和を保ちましたが、国民の間では外国に対する不信感や敵対心が高まりました。植民地でも独立を目指す動きが現れ、様々な対立が浮き彫りとなったヨーロッパは一触即発の状態となります。

そして1914(大正3)年6月、オーストリア皇位継承者の暗殺事件をきっかけに第一次世界大戦が始まりました。世界大戦には日本も日英同盟を口実に権益拡大のため参戦。さらにアメリカと中国の参戦や植民地からの動員により、戦場は世界各地へと広がり、史上初の世界戦争となりました。

資料・グラフィック候補

- ・帝国主義に関する写真や絵画
- ・ヨーロッパの火薬庫の風刺画
- ・サラエボを訪れたオーストリア皇位継承者夫妻の写真
- ・第一次世界大戦中の世界地図 など

トピック:第一次世界大戦と日本

明治維新後、欧米諸国と対等な国家を目指した日本は、日清・日露戦争を経て台湾や南樺太、朝鮮を植民地化し、満洲(現・中国東北部)の一部に権益を持つアジアで唯一の帝国主義国家となりました。日本にとって第一次世界大戦は権益拡大の好機であり、日英同盟を口実に参戦。太平洋のドイツ領南洋諸島とドイツの膠州湾租借地を占領し、中国には日本の権益の確保と拡大を求める二十一カ条の要求を出すなど、海外進出を進めました。

資料・グラフィック候補

- ・第一次世界大戦に参戦した日本軍の写真
- ・第一次世界大戦に従軍した兵士の資料 など

小項目:3-1-2.総力戦と新兵器の出現

第一次世界大戦は、総力戦と新兵器の出現により、戦争の被害が拡大する契機となりました。ヨーロッパの戦場では、大砲や機関銃などの弾丸から身を隠す塹壕戦となり、戦線が膠着。戦況の行き詰まりを打開すべく、戦車や飛行機といった新兵器が次々と開発・投入され、毒ガスのような大勢の人間を瞬時に殺傷する大量破壊兵器も登場しました。

また、戦争が長期化したことで軍隊だけでなく国民や物資の全てを戦争に動員する総力戦体制が築かれ、一般市民も戦争に協力することが求められました。総力戦により戦場の境界が消滅したことで攻撃対象は戦闘員から非戦闘員へと拡大。第一次世界大戦の死者は 2500 万人以上にのぼりました。

資料・グラフィック候補

- ・第一次世界大戦で投入されたイギリス軍の戦車の写真
- ・塹壕でガスマスクを着用した兵士の写真
- ・女性に戦争協力を促すポスターや戦争に動員される植民地の人々の写真
- ・第一次世界大戦の映像 など

小項目:3-1-3.平和主義と国際協調体制の確立

第一次世界大戦の惨禍は平和への志向をもたらし、戦後は戦争のない世界に向けて新たな国際協調体制が確立しました。ヨーロッパの戦後秩序を定めたヴェルサイユ体制では、自国のことは自国で決める「民族自決の原則」により独立国が新たに誕生するほか、1920(大正9)年に国際協力で平和をつくる常設の国際機関として国際連盟が創設されました。

またアジア太平洋地域では、アメリカやイギリス、日本の協調を目指すワシントン体制が確立し、これ以上の領土や植民地の拡大は行わないことで合意し、海軍の軍備を縮小する条約も結びました。そこでは日本も協調外交を展開し、戦後の国際協調と軍縮は順調に進みました。

資料・グラフィック候補

- ・国際連盟第一回総会の写真
- ・常設国際司法裁判所が設置された平和宮や国際労働機関の写真
- ・ワシントン会議の写真
- ・ワシントン体制下で結ばれた条約の表 など

トピック:反帝国主義の高まり

第一次世界大戦で植民地や従属地域は、将来の自治の拡大や独立と引き換えに戦争に協力したため、解放への期待を高めました。しかし、パリ講和会議で掲げられた「民族自決の原則」は、ヨーロッパのみに適用され、アジアやアフリカなどでは帝国の支配が続いたため、各地で独立をめざす民族運動が盛んになりました。朝鮮や中国でも日本の植民地支配や権益拡大に反対する運動が起こり、帝国主義に反発する声が大きくなっていきました。

資料・グラフィック候補

- ・「独立万歳」と叫びながら行進する女学生の写真

・デモ行進する北京大学の学生の写真

小項目:3-1-4.戦闘行為の規制と戦争の違法化

国際社会は、世界大戦以前から国際紛争の平和的解決だけでなく、戦時の非人道的な行為に歯止めをかけるため、軍事施設以外への攻撃や不必要な苦痛を与える兵器の使用を禁止していました。しかし、第一次世界大戦を防げず、空襲や毒ガスで多数の犠牲を出したため、1923(大正12)年に無差別爆撃を違法とする「ハーグ空戦規則案」が国際連盟で作成され、25年には生物兵器と化学兵器の使用を禁止する「ジュネーブ議定書」が採択されました。そして28年には国際紛争の平和的手段による解決を規定する「パリ不戦条約」が成立し、これまで合法とされてきた戦争が違法化されました。

資料・グラフィック候補

- ・女性による反戦運動の写真
- ・パリ不戦条約に署名・調印する各国全権の写真
- ・戦闘行為や戦争を規制する国際法の表(世界大戦以前の取り決めも含む)など

トピック:対立へと向かう日中関係

1926(大正15)年、中国では国家統一に向けて外国から奪われた権益の回収を目指す動きが現れました。国際連盟の常任理事国となった日本は不戦条約に参加するなど協調外交を展開しましたが、中国の日本権益が脅かされることへの危機感から27年より山東出兵を行いました。また、日本の関東軍は、満洲を直接支配下に置くべく張作霖爆殺事件を28年に起こし、日中関係は対立へ向かいました。

資料・グラフィック候補

- ・張作霖爆殺事件の写真
- ・青天白日旗が掲げられた奉天の写真 など

3-2.第二次世界大戦—戦争へ向かう日本と国際社会

小項目:3-2-1.満洲事変と国際連盟からの脱退

1930年代に入ると、日本やドイツなどでは世界恐慌による深刻な経済危機やヴェルサイユ・ワシントン体制に対する不満などから、領土の拡張と軍備の拡大を目指す勢力が台頭しました。日本では、31年に関東軍が満洲を日本の勢力下に置くべく、南満洲鉄道を爆破する柳条湖事件を起こし、これを中国側の行為として自衛と称した軍事行動を満洲各地に拡大。翌年「満洲国」を建国しました。

この満洲事変は国際紛争の平和的解決や中国の領土保全などを定める国際条約に反するものであり、国際連盟は「満洲国」の不承認を決

議しましたが、日本はこれに反対し国際連盟から脱退。ドイツやイタリアも後に続き、国際協調体制は崩壊に向かいました。

資料・グラフィック候補

- ・満洲事変と満洲国建国に関する写真
- ・抗日救国運動に関する写真
- ・国際連盟の風刺画
- ・「大満洲国」のチラシ など

トピック:ファシズムと軍部の台頭

1920年代にイタリアで生まれたファシズム体制は、世界恐慌ののちドイツにも広まりました。そこでは、強力なリーダーシップを持つ独裁者が国籍や思想が異なる人を排除しながら改革を進め、国民の支持を獲得しました。一方、関東大震災や昭和恐慌で経済的に困窮した日本では、腐敗した政党を倒して軍中心の内閣を樹立し、国家を造り直す動きが活発化し、二・二六事件以降、軍部の政治的発言力が増大していきました。

資料・グラフィック候補

- ・ムッソリーニとヒトラーの写真
- ・二・二六事件の写真 など

小項目:3-2-2.日中戦争の拡大と長期化

満洲事変は双方の話し合いにより一応の収束を迎えましたが、関東軍はさらなる勢力拡大を図ったため日中間の対立は激化。1937(昭和12)年7月、**北平(現・北京)**郊外で日中両軍が衝突した盧溝橋事件を契機に日中戦争が始まりました。日本軍は、中国の根強い抵抗にあいながら戦線を拡大し、12月に首都南京を占領。その過程で多数の民間人や捕虜を殺害する南京事件を引き起こしました。

日本軍が占領地を拡大する一方、中国の国民政府は重慶へ拠点を移し戦闘を継続。さらに国際社会の支持を獲得する努力を重ね、アメリカやイギリス、ソ連(現・ロシア)などの援助を受けながら、徹底抗戦を続けたため、日中戦争は泥沼化していきました。

資料・グラフィック候補

- ・日中戦争における日本軍の写真、中国の街と住民の写真
- ・国内の戦時体制に関する写真やポスター
- ・日中戦争に従軍した兵士の資料 など

トピック:無差別爆撃の本格化

飛行機が戦争で活用されるようになった第一次世界大戦以降、欧州諸国は植民地の反乱を抑えるため空爆を頻繁に実施するようになりました。また、日本軍も中国の都市に対する爆撃を開始し、1931(昭和6)年の錦州爆撃をはじめ南京や重慶などで多数の市民が犠牲となり、ヨーロッパでもスペインのゲルニカがドイツやイタリアの爆撃に晒されるなど、各地で市民を狙った無差別爆撃が本格化していきました。

資料・グラフィック候補

・重慶爆撃の写真 など

小項目:3-2-3.第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発

東アジアで日中戦争の戦火が続く中、ヨーロッパでもドイツやイタリアが領土拡張を進め、1939(昭和14)年、ドイツがポーランドを侵攻したことでイギリス・フランスが宣戦し、第二次世界大戦が始まります。翌年ドイツの優勢をみたイタリアが参戦し、両国はヨーロッパの大半を支配下に置きました。

一方、日本は、日中戦争の行き詰まりを打開するため、日独伊三国同盟を結び、東南アジアに進出しました。これに強く反発したアメリカは石油輸出の禁止などの経済制裁をとり、中国・仏印からの全面撤兵を要求しましたが、日米交渉は決裂。1941(昭和16)年12月8日、**アジア・太平洋戦争の開戦により日本とアメリカが第二次世界大戦へ参戦し、世界戦争の戦火は全世界へ拡大しました。**

資料・グラフィック候補

- ・ポーランドを侵攻するドイツ軍の写真
- ・真珠湾攻撃で炎上する戦艦アリゾナの写真
- ・連合国と枢軸国のプロパガンダポスター
- ・アジア太平洋戦争に関する映像 など

小項目:3-2-4.世界戦争の実相と展開

第二次世界大戦は、領土の拡大を目指す枢軸国と既存の支配地域を維持しようとする連合国の戦いとなりました。戦争は第一次世界大戦を上回る総力戦となり、両陣営問わず国内や植民地、占領地の人と物が動員され、戦争を支える人々の士気を喪失すべく、無差別爆撃が大規模に行われました。

当初、枢軸国に優勢だった戦局は徐々に劣勢に傾き、日本も1942(昭和17)年のミッドウェー海戦以降、形勢が逆転。44年には米軍の本土空襲が激化し、45年4月になると沖縄で激しい地上戦が行われます。そしてドイツ降伏後の7月、**アメリカ・イギリス・中国は無条件降伏を求めるポツダム宣言を発表しましたが、ソ連の和平斡旋に期待する日本は受諾しませんでした。**

資料・グラフィック候補

- ・女性に戦争協力を促すポスターや戦争に動員される植民地の人々の写真
- ・連合国による空襲と破壊された街の写真
- ・沖縄戦の写真
- ・アジア太平洋戦争に関する資料 など

トピック:「大東亜共栄圏」の実態

日本は、戦争の目的として欧米の植民地支配からのアジアの解放と「大東亜共栄圏」の建設を掲げました。しかし、実際は戦争遂行のためアジアの国々を支配下に置いて、資源を獲得することになり、植民地や占領地では民族の歴史や文化を無視する皇民化政策を進め、戦力や労働力、物資確保のため大きな負担を課しました。こうした日本の支配に対し、各地では抵抗運動が起りましたが、日本軍に弾圧されました。

資料・グラフィック候補

- ・大東亜共栄圏に関する写真 など

3-3.核時代の幕開け—原子爆弾の開発と投下

小項目:3-3-1.原爆の開発と実用化

第二次世界大戦では、多くの国民が動員され、様々な兵器の開発・改良が行われました。アメリカでは、ウランの核分裂連鎖反応により膨大なエネルギーが放出されることがわかると、ドイツの原爆開発に対する懸念から1939(昭和14)年より原爆開発の可能性を探る研究に着手。42年から「マンハッタン計画」を発足させ、20億ドルの経費と60万の人員を投じた原爆製造計画を始動させました。

そして3年後の45年7月16日、ニューメキシコ州アラモゴードで人類初の核実験「トリニティ」が実施され、ファットマンと同型のプルトニウム型原爆「ガジェット」は強烈な閃光を放ってさく裂。大量破壊兵器の頂点ともいえる核兵器は、関係者の期待以上の威力をもって完成しました。

資料・グラフィック候補

- ・アインシュタインとシラードの写真
- ・モード委員会報告書の写真
- ・マンハッタン計画に関する写真
- ・トリニティ実験の映像とガジェットの写真
- ・トリニタイト など

小項目:3-3-2.原爆の使用決定

アメリカとイギリスは1944(昭和19)年9月、原爆の対日使用の可能性について合意し、完成の見通しが立った45年4月から投下目標都市の検討を開始しました。そして5月に投下の事前警告は行わないことを決め、アメリカは7月25日に日本への原爆投下命令を発しました。

アメリカには戦争終結のため、日本本土上陸作戦のほか、ソ連への対日参戦の要請、原爆の使用を警告し、天皇制存続を保証することで降伏を促すなどの選択肢がありましたが、それらは排除して原爆の投下を決定しました。その理由として原爆投下により①早期終戦に導くことで自国の兵士の犠牲を減らそうとした、②戦後ソ連の東アジアにおける影響力増大を防ごうとした、③莫大な経費を使ったマンハッタン計画の成果を示そうとした、ことなどが考えられています。

資料・グラフィック候補

- ・ルーズベルト大統領とチャーチル首相の写真
- ・暫定委員会の議事録の写真
- ・原爆投下の報を待つトルーマン大統領の写真
- ・原爆投下命令書の写真 など

トピック:米軍による本土空襲の激化

第二次世界大戦では軍事目標だけでなく、都市や住民をねらった大規模な空襲が世界各地で行われました。米軍は1944(昭和19)年からB29による日本本土への爆撃を開始し、北海道から沖縄まで全国約100都市を無差別爆撃の標的としました。そこでは、多数の市民が焼夷弾の犠牲となり、最終的に死傷者は100万に上りました。その中で、市民を大量かつ無差別に殺傷する原爆が使われることとなります。

資料・グラフィック候補

- ・日本本土への主な空襲の表
- ・東京大空襲の写真 など

小項目:3-3-3.原爆投下に反対する人々

アメリカの軍人や科学者の中には、一般市民を大量に殺傷する原爆の使用に反対する人もいました。1945(昭和20)年5月、陸軍参謀総長のジョージ・マーシャルはスティムソン陸軍長官との会談で非戦闘員を大量に殺傷することに反対。ドイツ降伏後の6月、シカゴ大学の研究所にいたジェームズ・フランクら7名の科学者も、原爆の非人道性を指摘するとともに戦後核拡散の可能性や核軍縮への悪影響まで予測し、無警告での原爆の使用に反対するフランク報告をスティムソンに提出しました。また7月、レオ・シラードら69名の科学者も無警告での原爆投下は道徳的に問題と反対する請願書を大統領に提出しましたが、訴えが取り上げられることはありませんでした。

資料・グラフィック候補

- ・ジョージ・マーシャルの写真
- ・ジェームズ・フランクとフランクレポートの写真
- ・シラードとシラードの請願書の写真 など

小項目:3-3-4. 広島・長崎への原爆投下

原爆投下の目標都市は、原爆の威力を正確に測るため、重要な軍事施設や軍需工場が存在するだけでなく、一定以上の広さを持ち空襲を受けていないことを条件に選ばれました。そして1945(昭和20)年8月2日、アメリカは第1目標を広島、第2目標を小倉、第3目標を長崎とすることを決め、8月6日に広島へ原爆を投下。さらに8月9日、小倉が視界不良だったため目標を変えたB29は、長崎に原爆を投下し、多くの市民が傷つき、命を落としました。

日本はソ連の対日参戦を契機にポツダム宣言の受諾へ向かい、第二次世界大戦は5000万人以上の死者を出して終結します。戦後、世界は再び平和を目指して国際連合をつくりますが、大国による「核の時代」は新たに幕を開け、冷戦へと突入していきました。

資料・グラフィック候補

- ・原爆投下の目標とされた都市の図
- ・ファットマンとリトル・ボーイの写真
- ・原爆で壊滅した広島と長崎の写真 など

トピック:核兵器の使用をめぐる裁判

戦闘行為を規制した国際法は、軍事目標以外への攻撃や不必要な苦痛を与える兵器の使用を禁止しています。広島・長崎の被爆者が提訴した「原爆裁判」では、東京地方裁判所が「残虐な爆弾を投下した行為は不必要な苦痛を与えてはならないという戦争法の基本原則に違反している」との判決を1963(昭和38)年に下しています。また、96年に国際司法裁判所(ICJ)は「核兵器の威嚇と使用は一般的に国際法に違反する」との判断を示し、2021年の核兵器禁止条約の発効へつながっていきました。

<関連資料(候補)>

- ・「原爆裁判」判決文の写真 など

6 Cコーナー「核兵器の脅威」解説パネル原稿案

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

4-1-1. 原子力の国際管理の失敗

1945(昭和 20)年 10 月 24 日、第二次世界大戦を防げなかった国際連盟の反省を踏まえ、国際連合が発足しました。翌年 1 月には原子力委員会の設置が決議され、人類の破滅を阻止するために原子力の国際管理が検討されます。しかし、当時唯一の核保有国であったアメリカと、核兵器の開発段階にあったソ連(現・ロシア)との間で交渉がまとまらず、この構想は失敗に終わりました。核兵器廃絶に向けた機会を逃し、アメリカを中心とする資本主義陣営とソ連を中心とする社会主義陣営は、冷戦という世界規模の対立へと向かっていきます。

グラフィック候補

- ・冷戦の構造を示す地図

4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ

原子力の国際管理構想が暗礁に乗り上げると、1949(昭和 24)年にソ連が原子爆弾(原爆)の実験に成功し、世界で二番目の核保有国となりました。核の独占体制が崩れたことで、アメリカは水素爆弾(水爆)の開発を急ぎ、1952(昭和 27)年に太平洋上で初めての水爆実験を行います。その威力は原爆より桁違いに大きく、長崎に投下されたファットマンの 450 倍以上に達しました。水爆は原爆を起爆装置とし、重水素や三重水素に核融合反応を起こさせる仕組みです。1955(昭和 30)年、ソ連もアメリカに対抗して水爆実験を成功させました。

資料候補

- ・水爆実験の写真
- ・世界終末時計に関する資料

4-1-3. 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動

水爆実験は、新たに民間人の被ばく者を生み出しました。1954(昭和 29)年 3 月 1 日、マーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカが水爆「ブラボー」の実験を行い、日本のマグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員が被ばくしました。これをきっかけに、原水爆禁止運動が全国で広がります。翌年 8 月には第 1 回原水爆禁止世界大会が広島で開催され、海外の代表を含む 5,000 人以上が参加しました。大会では、原水爆の禁止を求める署名が日本で 3,216 万人分、世界で 6 億 6,000 万人分集まったと報告されています。核実験の禁止や核兵器の廃絶を求める声が、世界中で大きくなっていきました。

資料候補

- ・第五福竜丸事件に関する資料
- ・原水爆禁止世界大会の写真

4-1-4. 世界が最も核戦争に近づいた日

1962(昭和 37)年 10 月 16 日、ソ連がアメリカ本土に近いキューバに核ミサイルを配備しようとしたことで「キューバ危機」が起きました。アメリカはキューバを海上封鎖し、武力で阻止することも辞さない構えを示します。米ソ間の緊張は極度に高まり、核戦争勃発の危機に直面しました。最終的には同月 28 日にソ連が核ミサイルを撤去したことで回避されますが、この 13 日間は「世界が最も核戦争に近づいた日」となりました。これを教訓として、翌年には核実験を制限する初めての国際的な取り決めである部分的核実験禁止条約(PTBT)が、アメリカ・イギリス・ソ連との間で締結されました。

資料候補

- ・キューバ危機の写真
- ・米ソによる核戦争の危機を風刺した作品

4-1-5. 核拡散防止への取組み

核戦争が現実味を帯びたことで、核兵器のない世界を目指す国際社会の取組みが進展します。1970(昭和 45)年、核不拡散、核軍縮、原子力の平和利用を目的とする核兵器不拡散条約(NPT)が発効されました。背景には、アメリカとソ連に加えてイギリス、フランス、中国も核兵器を保有するようになったため、これ以上の拡散を防ぐ必要がありました。条約では、この 5 か国を「核兵器国」として認めながらも、核軍縮への誠実な交渉を義務づけています。一方で、「非核兵器国」には、原子力の平和利用を認める代わりに核兵器の保有を禁止しました。NPT は現在、国連加盟国のほとんどが参加する普遍的な条約となっていますが、核兵器国と非核兵器国で異なる義務を負っているため、不平等条約という指摘があります。また、平和利用を隠れ蓑にした核兵器の開発も問題となっています。

資料候補

- ・核兵器廃絶への取組みに関する写真や資料

4-2. 新たな核リスクの出現

4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散

1989(平成元)年 12 月、アメリカとソ連(現・ロシア)の両首脳が冷戦の終結を宣言すると、核兵器の削減が進められました。また、1996(平成 8)年には、PTBT で制限されていなかった地下核実験を禁止する包括的核実験禁止条約(CTBT)が国連総会で採択されました。その一方で、非核兵器国による核開発が次々と公然化していきます。アジアでは、1998(平成 10)年にインドが地下核実験を強行して核保有国になると、領土問題で対立しているパキスタンも対抗して核実験を行いました。北朝鮮は以前から核開発疑惑がありましたが、2003(平成 15)年に NPT からの脱退を宣言し、3 年後に核実験を強行しました。中東では、冷戦期からイスラエルの核保有疑惑がありましたが、否定も肯定もしない曖昧政策を取り続けています。

資料候補

- ・新興核保有国の核開発に関する資料

4-2-2. 核兵器関連物質と開発技術の流出

冷戦終結後の新たな核拡散に伴い、核兵器関連物質や開発技術の流出という問題が表面化しました。1991(平成 3)年にソ連が崩壊すると、その混乱に乗じて流出したと思われる解体後の核兵器から回収された核物質の密輸事件が相次ぎます。2004(平成 16)年には、パキスタンの核開発を主導した A.Q.カーン博士の告白により、「核の闇市場」の存在が明るみに出ました。

グラフィック候補

・核の闇市場に関する図

4-2-3. 核テロの危険性

核物質が流出し、国家だけでなくテロリストなどの手にも渡ることが危惧されています。2011(平成 13)年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件以降、その懸念が増大しました。国際原子力機関(IAEA)では、想定される核テロとして、放射性物質の発散装置(ダーティー・ボム)の製造、原子力施設や放射性物質の輸送等に対する妨害破壊行為などを挙げています。

グラフィック候補

・想定される核テロリズムの図

4-3. 岐路に立つ国際社会

4-3-1. 核使用リスクの高まり

冷戦終結から 30 年が経過すると、世界は新たな大国間競争の時代を迎えました。中国の超大国化に伴う急速な核軍拡もあり、アメリカ・中国・ロシアによる不安定な核抑止関係へと変容しています。加えて、宇宙空間やサイバー空間などの新領域や、人工知能(AI)をはじめとする新興技術の急速な発展が、核兵器システムのあり方にも影響を及ぼしています。これらは新たな核軍拡競争を招くだけでなく、情報の伝達ミスや偶発的な事故のリスクを高める要因となります。

一方、これまで核兵器を管理してきた国際的な枠組みが、深刻な状態に陥っています。NPT 再検討会議は 2 回連続で合意文書の採択に失敗し、CTBT も未だに発効する見通しはありません。また、2019(令和元)年、冷戦終結の象徴となっていた米口間の中距離核戦力全廃条約(INF 条約)が失効しました。2026(令和 8)年には、米口間で唯一残された核軍縮の枠組みである新戦略兵器削減条約(新 START)が失効しています。

資料候補

・核兵器使用のシミュレーション
・「核の脅し」を報じる新聞記事

4-3-2. 核兵器禁止条約の発効

危機的な状況が続く中でも、核兵器廃絶を目指す歩みが止まることはありませんでした。2017(平成 29)年 7 月 7 日、国連加盟国の 6 割を超える 122 か国の賛成により核兵器禁止条約(TPNW)が採択され、2021(令和 3)年 1 月 22 日に発効しました。この条約は核兵器を「非人道兵器」

と位置づけ、その開発と保有、使用あるいは使用の威嚇を含むあらゆる活動を例外なく禁止しています。前文では、国際条約として初めて「hibakusha(ヒバクシャ)」の言葉が使用されました。

資料候補

・核兵器禁止条約の採択時の写真

グラフィック候補

・核兵器禁止条約に署名している国の一覧

4-3-3. 日本被団協のノーベル平和賞受賞

核兵器禁止条約の採択に大きな貢献をしたのが、1956(昭和 31)年に長崎で結成された日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)です。核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきたことが評価され、2024(令和 6)年 12 月にノーベル平和賞を受賞しました。ノーベル委員会は、核兵器の使用は道徳的に許されないとする「核のタブー」が圧力にさらされていると指摘し、今こそ被爆者の声に耳を傾ける必要があると訴えました。

資料候補

・ノーベル平和賞の授賞式の写真

※資料やグラフィックは、今後の検討状況によって適宜更新する。

第3回長崎原爆資料館運営審議会（R8.2.17）での主な意見

目次	ページ
1 長崎原爆資料館展示更新実施設計（最終案）について	2
2 展示概要案について	3
3 解説パネル原稿案（修正版）について	5

第3回長崎原爆資料館運営審議会での主な意見

1 長崎原爆資料館展示更新実施設計(最終案)について

ページ (別冊1)	区分	主な意見
26	核兵器の脅威 (体験展示)	イマーシブ体験は単に映像を見せるだけでなく、世界には多くの核実験の被害者がいることも伝えてはどうか。
		<ul style="list-style-type: none"> 例えば爆発音など「音」の活用について、映像展示の施工の際に検討してほしい。 「音」の活用については、再現が難しく、また小学生などのトラウマとなる懸念もあることから想像で補う形が望ましい。
		来館者が受け身ではなく、しゃがむ、掴む、ヘッドフォンをつけるといった、能動的に動いて展示を体験できる仕組みがほしい。
37	平和は長崎から	Cコーナーの最後で提示する「長崎を最後の被爆地に」のメッセージは、来館者に当事者意識を持ってもらえるような言葉を追加してはどうか。
		世界のリーダーが資料館見学後に残したメッセージなどを紹介してほしい。
全般	その他	解説文の文字の大きさやルビの振り方など、来館者に配慮したものとなるよう施工時にしっかり対応してほしい。
		展示の内容を振り返られるような副読本を多言語で用意したらどうか。

第3回長崎原爆資料館運営審議会での主な意見

2 展示概要案について

(1) Bコーナー「2. 原爆による被害の実相」

2-9. 救援・救護活動 2-10. 被爆者と遺族の戦後

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
2	2-9-1. 混乱と慟哭の中で	長崎のまちが壊滅し、あらゆる救護活動が不可能な状況に陥っていたことを理解できるようにしてほしい。 長崎医科大学（現・長崎大学医学部）や新興善国民学校救護所で行われた医師や救援隊の活動を紹介してほしい。
2	2-9-2. 永井隆博士	戦時中の物資不足により、レントゲン撮影の際に医療者が放射線をあびることを防ぐ環境が十分ではなかった。それが原因で永井博士も白血病を患うことになったことを紹介してほしい。
2	2-10-4. 社会的な差別や偏見	女性の被爆者の多くは縁談などに関して大変な思いをしているので、その苦勞をぜひ伝えてほしい。

(2) Cコーナー「3. 二つの世界大戦」

戦時下の長崎

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
3	2. 長崎から戦場へ	展示概要案では「日中戦争以降、兵士の数が不足すると大勢の男性が戦地に送られるようになり」とあるが、兵士の不足については戦線の拡大・泥沼化が背景にあることを詳しく記載してほしい。
3	4. 勤労働員の日々	学校で軍事教練が行われたことを紹介してほしい。 日本人だけでなく、朝鮮人や中国人、オランダ人捕虜が労働に従事させられたことを紹介してほしい。

第3回長崎原爆資料館運営審議会での主な意見

(3)Cコーナー「5. 長崎のあゆみ」

5-1. 焦土からの復興 5-2. 核兵器廃絶と平和希求 5-3. 被爆の実相の継承

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
4	5-1-1. 被爆後の暮らし	被爆者手帳が交付されていない時代に、復興の影で苦しんでいた人たちがいたことも紹介してほしい。
5	5-1-3. 長崎国際文化都市建設法	広島動きを受けて長崎でも長崎国際文化都市建設法制定への機運が高まったことなど、広島と長崎の連携した動きを意識しながら説明してほしい。
6	5-2-4. 次世代がつむぐ平和	長崎では平和教育が熱心に行われていることや子どもたちの平和活動の様子なども紹介してほしい。
7	5-3-2. 被爆遺構の保存と活用	長崎刑務所浦上刑務支所の遺構の出土をきっかけに保存運動が起こるなど、市民の声で被爆遺構が残されてきたことを紹介してほしい。

第3回長崎原爆資料館運営審議会での主な意見

3 解説パネル原稿案(修正版)について

(1) Bコーナー「2. 原爆による被害の実相」

2-8. 放射線による被害

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
9	2-8-2. 初期放射線と残留放射線	被爆体験者の問題を取り上げてほしい。被爆地域の線引きが行政単位で行われたため、いびつな構造になっている。
10	2-8-6. 遺伝的影響	「影響も完全には否定できていない」とあるが、「完全には」はなくてもよいのではないか。

(2) Cコーナー「3. 二つの世界大戦」

3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた国際秩序の形成

3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と国際社会

3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
16	3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化	<ul style="list-style-type: none"> 「侵略」の文言を使ってほしい。 「侵略」の文言を使うことに違和感はないが、どこの記述で使うかは検討する必要がある。 市内の中学校で使用されている教科書では、本文では「南京事件」とあるものの、注釈に「南京大虐殺とも呼ばれます」とあることから、その点も配慮した記述を検討してほしい。 解説パネル原稿案では日本軍が民間人や捕虜を殺害したことは説明されているため、歴史用語として広く共有された「南京事件」を使用すべきでないか。
19	3-3-2. 原爆の使用決定	原爆投下は人体実験だったことを紹介してほしい。

第3回長崎原爆資料館運営審議会での主な意見

(3) Cコーナー「4. 核兵器の脅威」

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

4-2. 新たな核リスクの出現

4-3. 岐路に立つ国際社会

ページ (別冊2)	小項目	主な意見
23	4-3-1. 核使用リスクの高まり	若い世代に今の国際情勢を伝えるために、終末時計のことも記述してほしい。